

こころ

夏目漱石



上 先生と私

一

わたくし

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚はばかる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執とつても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字かしらもちなどはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉かまくらである。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた

友達からぜひ来いという端書はがきを受け取ったので、私は多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日さんちを費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちすすに勧めない結婚を強しいられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心かんじんの当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病気であるとすれば彼は固もとより帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一

人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留とまる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて一人ひとりぼつちになった私は別に恰好かつこうな宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙へんぴな方角にあつた。玉突きたまつきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇なわてを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燠くすぶり返った藁わら葺ぶきの間あいだを通り抜けて磯いそへ下りると、この辺へんにこれほどの都会人種が住んでゐるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢湯せんとうのように黒い頭でごちやごちやしてゐる事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑にぎやかな景色の中に裹つつまれて、砂の上に寝ねそべつてみたひざがしらり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻まわるのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓ざつとくの間あいだに見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋かけぢややが二軒あつた。私はふとした機はずみ会からその一軒の方に行き慣なれてゐた。長谷辺はせへんに大きな別荘を構かえてゐる人と違ちがつて、各自めいめいに専有せんゆうの着換場きがえばを拵こしらへてゐないここいらの避暑客には、ぜひともした共同着換所といった風ふうなものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息ほかする外に、

ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹しおはゆい身体からだを清めたり、
ここへ帽子や傘かさを預けたりするのである。海水着を持たない私
にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびに
その茶屋へ一切いっさいを脱ぬぎ棄すてる事にしていた。

二

わたくし
私わたくしがその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱
いでこれから海へ入ろうとするところであつた。私はその時反
対に濡ぬれた身体からだを風に吹かして水から上がつて来た。二人の間
には目さへぎを遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限
り、私はついに先生を見逃したかも知れなかつた。それほど浜
辺が混雑し、それほど私の頭が放漫ほうまんであつたにもかかわらず、
ころ

私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行つて、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたのだ、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶

や紺こんや藍あいの色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼めには、猿股一つで済まして皆みんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一言二言何かいっただ。その日本人は砂の上に落ちた手拭てぬぐいを拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿うしろすがたを見守つていた。すると彼らは真直まつすぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅とおあさの磯いそ近くちかにわいわい騒いでいる多人数たにんずの間あいだを通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引

き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行つてしまつた。

彼らの出て行つた後あと、私はやはり元の床几しょうぎに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかつた。しかしどうしてもいつどこで会つた人か想おもい出せずにしまつた。

その時の私は屈托くつたくがないというよりむしろ無聊ぶりように苦しんでいた。それで翌日あくるひもまた先生に会つた時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋かけぢややまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人むぎわらばう麦藁帽かぶを被かぶつてやつて来た。先生は眼鏡めがねをとつて台の上に置いて、すぐ手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。先生

が昨日きのうのように騒さわがしい浴客よくかくの中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追おい掛かけたくなつた。私は浅い水うみの頭の上まで跳はかして相当の深さの所まで来て、そこから先生をめじるし目標めきでに抜手ぬきでを切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線こせんを描えがいて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかつた。私が陸おかへ上がつて雫しずくの垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

三

わたくし私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機

会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて行つた。周囲がいくら賑にぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いつしよに來た西洋人はその後ごまるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或る時先生が例の通りさつきと海から上がつて来て、いつもの場所に脱ぬぎ棄すてた浴衣ゆかたを着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振ふるつた。すると着物しろがすりの下に置いてあつた眼鏡が板の隙間すきまから下へ落ちた。先生は白緋しろがすりの上へ兵児帯へこおびを締めてから、眼鏡の失なくつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛こしかけの下へ首と手

を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといつて、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といつしよの方角に泳いで行つた。二丁^{ちよう}ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海^{あお}の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外^{ほか}になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歡喜に充ち^みた筋肉を動かして海の中で躍り狂^{おど}つた。先生はまたぱたりと手足の運動を已^やめて仰向けになつたまま浪^{なみ}の上に寝た。私もその真似^{まね}をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですな」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、

「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い體質をもった私は、もつと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。

先生と掛茶屋かけぢややで出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここにいますつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極きまりが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出

た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内けいだいにある別荘のような建物であつた。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解わかつた。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に對する私の口癖くちくせだといつて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風變りのところや、もう鎌倉かまくらにいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付ちかづきになつたのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思ひ出せないといった。若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑つた。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかつた。ところ

が先生はしばらく沈吟^{ちんぎん}したあとで、「どうも君の顔には見覚え^{みおぼ}がありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

四

私^{わたくし}は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「これから折々^{たく}お宅へ伺つても宜^よござんすか」と聞いた。先生は単簡^{たんかん}にただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃^{こまや}かな言葉を予期して掛^かつたのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷^{いた}めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺^{うご}かされるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解^{わか}らなかつた。それが先生の亡くなつた今日^{こんにち}になつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々^{ときどき}の素気^{そけ}ない挨拶^{あいさつ}や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。

傷^{いた}ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止^よせという警告を与えたのである。他^{ひと}の懐かしみに応じない先生は、他^{ひと}を軽蔑^{けいべつ}する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数^{ひかず}があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経^たつうちに、鎌倉^{かまくら}にいた時の気分が段々薄くなつて来た。そうしてその上に彩^{いろど}られる大都会の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟^{しげき}と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の

弛^{たる}みができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室^{へや}の中を見廻^{みまわ}した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生の宅^{うち}を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えてゐる。晴れた空が身に沁^しみ込むように感ぜられる好^いい日和^{ひより}であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵^{たいてい}宅にゐるといふ事を聞いた。むしろ外出嫌いだといふ事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理^{わけ}由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女^{げじょ}の顔を見て少し躊躇^{ちゅうちよ}してそこに立つていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内^{うち}へはいつた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さ

んであつた。

私はその人から鄭寧^{ていねい}に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司^{ぞうし}ヶ谷の墓地にある或^ある仏へ花を手向^{たむ}けに行く習慣なのだそうである。「たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥^{おく}さんは氣の毒そうにいつてくれた。私は会釈^{えしやく}して外へ出た。賑^{にぎや}かな町の方へ一丁^{ちよう}ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる氣になつた。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵^{きびす}を回^{めぐ}らした。

五

わたくし
私は墓地の手前にある苗畠^{なえばたけ}の左側からはいつて、両方^{かえで}に楓を

植え付けた広い道を奥の方へ進んで行つた。するとその端れに
見える茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその
人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄つて行つた。そうして出し
抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まつて
私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼
の中うちに異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応え
られなくなつた。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。
けれどもその表情の中うちには判然はつきりいえないような一種の曇りがあつ
た。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰^{だれ}の墓へ参りに行つたか、妻^{さい}がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやいせん」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会つたあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心^{とくしん}したらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解^{わか}らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉^{イサベラ}何々

の墓だの、神僕^{しんぼく}ロギンの墓だのという傍^{かたわら}に、一切衆生悉有^{いつさいししゅじようしつうぶつしよう}仏生と

書いた塔婆^{とうば}などが建ててあつた。全権公使何々というのもあつ

た。私は安得烈^{あんどれ}と彫^ほり付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしよう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしようね」といつて先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽こっけいもアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石はかいしだの細長い御影みかげの碑ひだのを指して、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまい「あなたは死という事実をまだ真面目まじめに考えた事がありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちょうが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地面は金色きんいろの落葉で埋うずまるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹つぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鍬くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れ

てすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利きかなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしよに歩いて行つた。

「すぐお宅たくへお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」
「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちやうほど歩いた後あとで、先生が不意にそこへ戻つて来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかった。

六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数どすうが重なるにつれて、私はますます繁しげく先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶あいさつをした時も、懇意こんいになったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時いつも静かであつた。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思つていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもつていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後のちになつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿ばかげていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉うれしく思っている。人間を愛し得うる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところに入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であつた。

今いった通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射^さすように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉間^{みけん}に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞^{けつたい}に過ぎなかつた。私の心は五分と経^たたないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春^{こはる}の尽きるに間^まのない或^ある晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏^{いちょう}の大樹^{たいじゆ}を眼^めの前に想^{おも}い浮かべた。勘定してみると、先生が

毎月例として墓参に行く日が、それからちようど三日目に当つていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であつた。

私は先生に向かつてこういつた。

「先生どうしがや雑司ヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしようか」

「まだ空坊主にはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。私はすぐいつた。

「今度お墓参りにいらつしやる時にお伴ともをしても宜よござんすか。

私は先生といつしよにあすこいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじやないですよ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好いじやありませんか」

先生は何とも答えなかつた。しばらくしてから、「私のは本当

の墓参りだけなんだから」といつて、どこまでも墓参ぼさんと散歩を切り離そうとする風ふうに見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いいからいっしょに伴つれて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉まゆがちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光かすが出た。それは迷惑とも嫌悪けんおとも畏怖いふとも片付けられない微かすかな不安らしいものであつた。私は忽たちまち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生がいつた。「私はあなたに話す事のできないある

理由があつて、他^{ひと}といつしよにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻^{さい}さえまだ伴れて行つた事がないのです」

七

こころ
私は不思議に思つた。^{わたくし}しかし私は先生を研究する気でその宅^{うち}へ出入^{でい}りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊^{たつと}むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際^{つきあい}ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋^{つな}ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覺していなかつた。

それだから尊^{たつと}いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼^{まなこ}で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅^{うち}へ行くようになった。私の足が段々^{しげ}繁くなつた時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやつて来るのですか」

「何でといつて、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔^{じやま}なんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。

私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時々たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといつて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得要領のものであつたが、私はその時底まで押さずに帰つてしまった。しかもそれから四

日と経^たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否^{いな}や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といつて自分も笑った。

私は外^{ほか}の人からこういわれたらきつと癩^{しやくさわ}に触^{さわ}つたろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であつた。癩^{しやくさわ}に触^{さわ}らないばかりでなくかえつて愉快だつた。

「私は淋^{さび}しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰^{くり}り返した。「私は淋^{さび}しい人間ですが、ことによるとあなたも淋^{さび}しい人間じゃないですか。私は淋^{さび}しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしよう。動いて何かに打^ぶつかりたいのでしよう……」

「私はちつとも淋さむしくはありません」

「若いうちほど淋さむしいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅うちへ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会つてもおそらくまだ淋さびしい気がどこかでして
いるでしょう。私にはあなたのためにその淋さびしさを根元ねもとから引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外ほかの方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなりします」

先生はこういつて淋さむしい笑い方をした。

幸^{さいわ}いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私^{わたくし}は、この予言の中^{うち}に含まれている明白な意義さえ了解し得なかつた。私は依然として先生に会いに行つた。その内^{うち}いつの間にか先生の食卓^{めし}で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利^きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかつた。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいつて、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた。それが原因^{げんいん}かどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。しかしそれ以外に私はこれといつてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないよう

な気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかったのだと解釈する方が正当かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じも残つていない。

ある時私は先生の宅うちで酒を飲まされた。その時奥さんが出て来て傍そばで酌しやくをしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑のみ干した盃さかずきを差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後あと、迷惑めいわくそこ

うにそれを受け取った。奥さんは綺麗な眉きれいなまゆを寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下しものような会話が始まつた。

「珍しい事。私に呑めとおつしやつた事は滅多めったにないのにね」
「お前は嫌いだからさ。しかし稀たまには飲むといいよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少しご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好い心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好いから」
先生の宅は夫婦と下女げじよだけであつた。行きたびに大抵たいていはひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかつた。或る時あときは宅の中にいるものは先生と私だけのようないふた。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていつた。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「一人貫もらつてやろうか」と先生がいつた。

「貫もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経たつたつてできつこないよ」と先生がいつた。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて高く笑った。

九

私^{わたくし}の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦^{いっつい}の一对であつた。家庭の一員として暮した事のない私のことから、深い消息は無^{わか}論解らなかつたけれども、座敷で私と対坐^{たいざ}している時、先生は何かのついでに、下女^{げじょ}を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。(奥さんの名は静^{しず}といった)。先生は「おい静^{しず}」といつても襖^{ふすま}の方を振り向いた。その呼びかたが私には優^{やさ}しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚^{はなは}だ素直であつた。ときたまご馳走^{ちそう}になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、

この関係が一層明らかに二人の間に描き出されるようであつた。
 先生は時々奥さんを伴^つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。
 それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶に
 よると、二、三度以上あつた。私は箱根^{はこね}から貰^はつた絵端書^{えはがき}をま
 だ持つてゐる。日光^{にっこう}へ行つた時は紅葉^{もみじ}の葉を一枚封じ込めた郵
 便も貰^はつた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなもの
 であつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私が
 いつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の
 方でだれかの話し声^{いさか}がした。よく聞くと、それが尋常の談話で
 なくつて、どうも言逆^{いさか}いらしかつた。先生の宅は玄関の次がす
 ぐ座敷になつてゐるので、格子^{こうし}の前に立つていた私の耳にその
 言逆^{いさか}いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先

生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音おんなので、誰だか判然はつきりしなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ歸つた。

妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。先刻さつき帯の間へ包くるんだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は歸つたなりまだ袴はかまを着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ

ば、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といつて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ懸かかつていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さつた時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。

「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかつた。

「実は先刻妻さつきさいと少し喧嘩けんかをしてね。それで下くだらない神経を昂奮こうふんさせてしまつたんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁ちようも二丁もつづいた。

その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移って行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。先生の宅へ帰るには私の下宿のつい傍を通るのが順路であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないよ

うな気がした。「ついでにお宅たくの前までお伴ともしましょうか」といった。先生は忽ち手たちまで私を遮さえぎった。

「もう遅いから早く帰りましたまゑ。私も早く帰つてやるんだから、妻君さいくんのために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後ごも長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかった。

先生と奥さんの間に起つた波瀾はらんが、大したものでない事はこれでも解わかった。それがまた滅多めったに起る現象でなかった事も、その後絶えず出入でいりをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻さい以

外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」

私は今前後の行き掛りを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然という事ができない。けれども先生の態度の真面目であつたのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきであると断わつたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であつた。先生は事実をたして幸福なのだろう

か、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中うちで疑うたぐらざるを得なかつた。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬ほうむられてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向さむかいで話をする機会に出合つた。先生はその日横浜よこはまを出帆しゅつぱんする汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋しんばしへ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待つてゐるやうにといひ残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話を

した。

十一

その時の私はわたくしすでに大学生であつた。始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意だいふになつた後のちであつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向さしむかいで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ帰つ

て少し経^たつてから始めて分^わつた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切^{みつせつ}の關係をもつてゐる私より外^{ほか}に敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜^おしい事だといつた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利^きいては濟まない」と答えるぎりで、取り合^あわなかつた。私にはその答^{こた}えが謙遜^{けんそん}過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞^{きこ}こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰^{だれ}彼^{かれ}を捉^{とら}えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙^あげて云々^{うんぬん}してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でゐるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調

子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解^{わか}らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇氣が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄^だ目^めですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下^{くだ}らない事だと悟^わつていらつしやるんでしょうか」

「悟^わるの悟^わらないのつて、——そりや女だからわたくしには解

りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょうか。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解^{わか}らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だつて、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけに微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真面目^{まじめ}だつた。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に

思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらつしやったんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

十二

こころ

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生から奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは「本当いうと合あいの子こなんですよ」といった。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出

であるのに、お母さんの方はまだ江戸といった時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、奥さんは冗談にいがた半分そういつたのである。ところが先生は全く方角違いの新潟県人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになつてから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何もかも聞き得なかつた。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎つつしんでいるのだらうと思つた。時によると、またそれを悪くも取つ

た。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶つやっぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もつともどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描えがき得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見惨みじめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のために
むしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻さつきいつた
通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつ
た。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由の
ために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時花時分はなじぶんに私
は先生といつしよに上野うえのへ行つた。そうしてそこで美しい一対いっつい
の男女なんによを見た。彼らは睦まじむつそうに寄り添つて花の下を歩いて
いた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙そばだて
ている人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲が好よさそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外ほかに置くよ

うな方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、ひやか冷評しましたね。あのひやか冷評のうちに
は君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声まじが交つ
ていましたよ」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声
を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪惡ですよ。解わかつ

ていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉し^{うれ}そうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私^{わたくし}がその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはず

です。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃないませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物がなから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思つて動きたくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃないですか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」
「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同

性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われ
ます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思ひになれば仕方ありませんが、私にそんな気の起つた事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪惡なんだから。私の

所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦朧もうろうとしてよく解わからなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪悪という意味をもつと判然はつきりいつて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実まことを話している気でいた。ところが実際は、あなたを焦慮じうろしていたのだ。私は悪い事をした」先生と私とは博物館の裏から鶯溪うぐいすだにの方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間すきまから広い庭の一部に茂る熊笹くまざさが幽邃ゆうすいに見えた。

「君は私がなぜ毎月まいげつ雑誌ざうし司がケ谷やの墓地に埋うまつてゐる友人の墓へ参るのか知つていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこゝういつた。

「また悪い事をいつた。焦慮じちせるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮じちせるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれやで止めましょう。とにかく恋は罪惡ですよ、よござんすか。そして神聖なものです」

私には先生の話がますます解わからなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつた。

十四

年の若い私はややともすると一図いちずになりやすかった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りひとを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。

「あんまり逆上のぼせちやいけません」と先生がいった。

「覚さめた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯うけがつてくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになり

ます。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をばたばた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい声がした。その外ほかには何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁ちやうも深く折れ込んだ小路こうじは存外ぞんがい静かであつた。家の中うちはいつもの通りひっそりしていた。私は次の間まに奥さんのいる事を知っていた。黙つて針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していません。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていゝのです。自分を呪のろうより外ほかに仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしよう」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やっただ後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどつて行きたかつた。すると襖ふすまの陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解わからなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人

の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けなかったために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いふべき言葉を知らなかった。

十五

その後私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対してでも始終こういう態度に出るのだろうか。もしそう

だとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかったから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であつた。^{たち}先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋の輪廓^{りんかく}とは違つていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその

思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。（無論先生と奥さんとの間に起つた）。先生がかつて恋は罪惡だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告

げた。すると二人の恋からこんな厭世えんせいに近い覚悟が出ようはずがなかった。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとする」といった先生の言葉は、現代一般の誰彼たれかれについて用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようでもあった。

雑司ぞうしがやヶ谷にある誰だだれか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨げる魔物のようであつた。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話を
 しなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰つまつて行くせわ
 しない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であつた。先生の
 附近ふきんで盗難に罹かかつたものが三、四日続いて出た。盗難はいずれ
 も宵の口であつた。大したものを持つて行かれた家うちはほとんど
 なかったけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さ
 んは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空あけなければ
 ならない事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に
 奉職しているものが上京したため、先生は外ほかの二、三名と共に、
 ある所でその友人に飯めしを食わせなければならなくなつた。先生
 は訳を話して、私に帰つてくる間までの留守番を頼んだ。私は
 すぐ引き受けた。

十六

私^{わたくし}の行^いつたのはまだ灯^ひの点^つくか点^つかない暮^くれ方であつたが、
几帳^{きちようめん}面な先生はもう宅^{うち}にいなかった。「時間^{おく}に後^おれると悪い
て、つい今しがた出掛^{でかけ}けました」といつた奥^{おく}さんは、私^{わたし}を先生
の書齋^{しよさい}へ案内^{あんい}した。

書齋^{しよさい}には洋机^{ていぷる}と椅子^{いす}の外^{ほか}に、沢山^{せきやま}の書物^{しよぶつ}が美しい背皮^{せがわ}を並^{なら}べ
て、硝子^{がらすごし}越^{でんとう}に電燈^{でんとう}の光^{ひかり}で照^てらされていた。奥^{おく}さんは火鉢^{かひつ}の前に
敷^ふいた座蒲団^{ざぶたん}の上^{うへ}へ私^{わたし}を坐^{すわ}らせて、「ちつとそこいらにある本^{ほん}で
も読^よんでいて下さい」と断^{ことわ}つて出^でて行^いつた。私^{わたし}はちようど主人^{しゆじん}
の帰^{かへ}りを待ち受^うける客^{きやく}のよう^{よう}な氣^きがして済^すまなかつた。私^{わたし}は畏^{かしこ}
ま^まつたまま烟草^{たばこ}を飲^のんでいた。奥^{おく}さんが茶^{ちや}の間^まで何^{なに}か下女^{げじよ}に話^わ
してゐる声^{こゑ}が聞^{きこ}こえた。書齋^{しよさい}は茶^{ちや}の間^まの縁側^{えんがは}を突^つき当^{あた}つて折^しれ

曲つた角かどにあるので、棟むねの位置からいうと、座敷よりもかえつて掛け離れた静かさを領りようしていた。ひとしきりで奥さんの話し声が已やむと、後あとはしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝じつとしながら気をどこかに配つた。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に來た人のように鹿爪しかづめらしく控えている私をおかしそうに見た。「それじゃ窮屈きうくつでしょう」

「いえ、窮屈きうくつじゃありません」

「でも退屈たいくつでしょう」

「いいえ。泥棒が來るかと思つて緊張しているから退屈たいくつでもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持つたまま、笑いながらそこに立つ

ていた。

「ここは隅っこだから番をするには好くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後に尾いて書斎を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴っていた。私はそこで茶と菓子のご馳走になった。奥さんは寝られないといけないといつて、茶碗に手を触れなかつた。

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」
「いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」

こういつた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘うそです」と私がいつた。「奥さん自身嘘と知りながらそうおつしやるんでしよう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方かただけあつて、なかなかお上手じょうずね。空からっぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだともいわれるじゃありませんか。それと同おんなじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空からさかずきの盃でよくああ飽あきずに献酬けんしゅうができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛ていどかった。しかしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出みいだすほどに奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

十七

こころ

私はまだその後あとにいうべき事をもっていた。けれども奥さん

から徒ら^{いたず}に議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗^{こうちやぢやわん}の底を覗^{のぞ}いて黙つてゐる私を外^そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？ 一つ？ 二ツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数^{かず}を聞いた。奥さんの態度は私に媚^こびるというほどではなかったけれども、先刻^{さつき}の強い言葉を力^{つと}めて打ち消そうとする愛嬌^{あいぎょう}に充^みちていた。

私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。

「あなた大変黙り込^こじまつたのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱^{しか}り付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとくちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわけて下さいませんか。奥さんには空からな理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上うわの空そらでいつてる事じゃないんだから」

「じゃおっしゃい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじゃありませんか。私の所へ持つて来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから逃げちゃいけません。正

直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらつしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺つていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直つて聞かなくつても好いじゃありませんか」

「真面目くきつて聞くがものはない。分り切つてるとおつしやるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなつたら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどつちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなつたら後でどうなるでしょう

う。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」「そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんか。そういうと、己^{おのぼれ}惚になるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好^よく映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですわ」

「やつぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんです

ものの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより
 近頃ちかごろでは人間が嫌いになつてゐるんでしょう。だからその人間
 の一人いちにんとして、私も好かれるはずがないじゃありませんか」
 奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込めた。

十八

わたくし私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本
 の女らしくないところも私の注意に一種の刺激しげきを与えた。それ
 で奥さんはその頃ころ流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほと
 んど使わなかった。

私は女というものに深い交際つきあいをした経験のない迂闊うかつな青年で
 あつた。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的

物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるながような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかつた。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あつた。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえつて変な反撥力を感じた。はんばつりよく奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかつた。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかつた。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのでらうといつて、あなたに聞いた時に、あなたはおつしやつた事がありますね。元はああじゃなかつたんだつて」

「ええいいました。実際あんじゃなかつたんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々あなつて来たのよ」

「奥さんはその間^{あいだ}始終先生といつしよにいらしたんでしよう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう變つて行かれる原因^{げんいん}がちゃんと解^{わか}るべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛^{つら}いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍^{なんべん}あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからというだけで、取り合つてくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切^{とぎ}らした。下女^{げじよべや}部屋にいる下女はことりと音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「これでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点ない、欠点はおれの方にあるだけだということです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がななんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

始め私は理解のある女性わたくしとして奥さんによしように對していた。私がその氣で話しているうちに、奥さんの様子が次第に變つて來た。奥さんは私の頭腦に訴える代りに、私の心臓ハートを動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠わだかまりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開あけて見極めみきわようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世えんせい的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかつた。底を割ると、かえつてその逆を考いえていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中いまで厭いやになつたのだらうと推測していた。けれど、もどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事がで

きなかつた。先生の態度はどこまでも良人^{おと}らしかつた。親切で優^{かた}しかった。疑いの塊^{かたまり}りをその日その日の情合^{じやうあい}で包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からああなつたのか、それともあなたのいう人世^{じんせい}観^{かん}とか何とかいうものから、ああなつたのか。隠さずいつて頂戴^{ちやうだい}」

私は何も隠す気はなかつた。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかつた。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解^{わか}りません」

奥さんは予期の外^{はず}れた時に見る憐^{あわ}れな表情をその咄^{とつ}嗟^さに現わ

した。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかない方かたでしょう」

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになつた源げん因いんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけではなくるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい洩ひざつて膝ひざの上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すつて。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱しかられないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いいお友達が一人あつたのよ。その方かたがちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々變つて來たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解つていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて來たと思えば、そ

う思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、雑司ぞうしがやヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になつてゐるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。私はそれが知りたくつて堪たまらないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

二十

わたくし

私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども

私はもともと事の大根を攫つかんでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉すっかり皆は私に話す事ができなかった。したがって慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、おぼつか覚束ない私の判断に縋すがり付こうとした。

十時頃ごろになつて先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわつている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子こうしを開ける先生をほとんど出で合あい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行つた。下女げじよだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩センチメントぶためにとくに私を相手に拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊戯と取れない事もなかった。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰^{つぶ}させて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒がはいらなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういういながら、先刻^{さつき}出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂^{たもと}へ入れて、人通りの少ない夜寒^{よさむ}の小路^{こうじ}を曲折して賑^{にぎ}やかな町の方へ急いだ。私はその晩の事を記憶のうちから抽^ひき抜いてここへ詳^{くわ}しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子^{もら}を貰^{もら}って帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日^{よくじつ}午飯^{ひるめし}を食いに学校から帰ってきて、昨夜^{ゆうべ}机の上に載^のせて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレート^{とびいろ}を塗^ぬった鳶色^{とびいろ}のカステラを出して頬張^{ほおば}った。そうしてそれを食う時に、必竟^{ひつきよう}この菓子を私

にくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅へ出はいいりするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで繻絆というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈凌ぎになつて、結局身体の葉だぐらいの事をいつていた。

「こりや手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒くさいという

顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。
私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰つて来てくれと頼むように付け足してあつた。

父はかねてから腎臓じんぞうを病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性やまいであつた。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかつた。現に父は養生のお蔭かげ一つで、今日までどうかこうかこんにち凌しのいで

来たように客が来ると吹聴ふいちようしていた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機はずみに突然眩暈めまいがして引ッ繰り返つた。家内かないのものは軽症の脳溢血のういつけつと思ひ違えて、すぐその手当をした。後あとで医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあつた。私は学期の終りまで待つていても差支さしつかえあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんた。そのたびに一種の心苦しさを嘗なめた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数てかずと時間を省くため、私は暇乞いとまぎいかたがた先生の所へ行つて、要いるだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪かぜの気味で、座敷へ出るのが臆おつくう劫だといって、私をその書斎に通した。書斎の硝子戸ガラスどから冬に入いって稀まれに見るような懐かしい和やわらかな日光が机掛けつくえかの上に射さしていた。先生はこの日あたりの好いい室へやの中へ大きな火鉢を置いて、五徳ごとくの上に懸かけた金盥かなだらひから立たち上あがる湯氣ゆげで、呼吸いきの苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いいが、ちよつとした風邪かぜなどはかえつて厭いやなものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であつた。先生の言葉ことばを聞いた私は笑いたくなくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は眞平まっぴらです。先生だつて同じ事でしよう。試みにやつてご覧になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹^かりたいと思つてゐる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまへ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶箆^{ちやだんす}筒か何かの抽出^{ひきだし}から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧^{ていねい}に重ねて、「そりやご心配ですね」といった。

「何^{なん}遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いが。——嘔気はきけはあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大方おおかたないんでしょう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病気は思つたほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢して

こう凝^{じつ}としている。なにももう起きてても好^いいのさ」といった。しかしその翌^{よく}日^{じつ}からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。母は不承無性^{ふしようぶしょう}に太織^{ふとお}りの蒲団^{ふとん}を畳みながら「お父さんはお前^{わたくし}が帰つて来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。私^{わたし}には父の挙動^{きどう}がさして虚勢^{きよせい}を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事がある場合でなければ、容易^{ちちはは}に父母の顔を見る自由^きの利^きかない男であつた。妹は他国^{とく}へ嫁^{よめ}いだ。これも急場の間^{きやうだい}に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹^{きやうだい}三人のうちで、一番便利なのはやはり書生^{しやうせい}をしている私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業^{くわぎやう}を放り出して、休み前に帰つて来たという事が、父には大きな満足であつた。

「これしきの病氣に学校を休ませては氣の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎやうさんな手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元氣を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回さかへすといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極きわめて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心ようじんさえしていれば」

實際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのだ、私たちは格別それを氣に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしゃくの礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そう

して父の病状の思つたほど險惡でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔氣も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一言の見舞を附け加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂などをしてしながら、遙かに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸でも持つて行つてお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」

「旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生は

ただ親切ずくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というのと私と先生の間に書信の往復がたびたびあったように思われるが、事実は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰^{もら}っていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛^{あて}で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外^{そと}へは出なかった。一度天氣のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万^{きづか}一を氣遣^{きづか}つて、私が引き添^{そは}うように傍^{そば}に付いていた。私が心配して

自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかつた。

二十三

私は^{わたくし}退屈な父の相手としてよく将碁盤^{しょうぎばん}に向かつた。二人とも無精な性質^たなので、炬燵^{こたつ}にあたつたまま、盤^{ばん}を櫓^{やぐら}の上へ載^のせて、駒^{こま}を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団^{かけぶとん}の下から出すような事をした。時々持駒^{もちこま}を失^なくして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付^みけ出して、火箸^{ひばし}で挟^{はさ}み上げるといふ滑稽^{こっけい}もあつた。

「碁^ごだと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好^いいね、こうして楽に差

せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負け
た時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負け
ても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めの
うちは珍しいので、この隠居いんきよじみた娯楽が私にも相当の興味を
与えたが、少し時日が経たつに伴つれて、若い私の氣力はそのくら
いな刺戟しげきで満足できなくなった。私は金きんや香車きやうしやを握こつた拳こぶしを頭
の上へ伸ばして、時々思い切つたあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活
動活動と打ちつづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音
が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているよう
に感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間

から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人おとなしい男であつた。他ひとに認められるという点からいえばどつちも零れいであつた。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往來ゆききをした覚えおぼのない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭ひやというのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通りていぎどお通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持つて帰った。昔でいうと、儒者じゅしやの家へ切支丹キリシタンの臭いを持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留とまつた。私はつい面白くなくなつた。

早く東京へ帰りたくなった。

父の病氣は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極めた出立しゅったつの日を動かさなかった。

東京へ帰つてみると、松飾まつかさりはいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。

わたくし さつそく

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸しいたけもついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。鄭寧ていねいに礼を述べた奥さんは、次の間まへ立つ時、その折を持つて見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子おかし」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極きわめて淡泊たんぱくな小供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念けねんの問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

ようだい

「なるほど容体ようだいを聞くと、今が今どうという事もないようです

が、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」

先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹かかつていながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官しかんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘うそのような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといって、細君を起したぎり、翌あく朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父おやじもそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者^{とても}は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いでしょう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人^いなだから」

私はやや安心した。私の変化を凝^{じつ}と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆^{もろ}いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出^{いで}ですか」

「いくら丈夫の私でも、満更^{まんざら}考えない事ありません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじやありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解^{わか}らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭^{かげ}ですね」

「殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから父の病氣はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後^{あと}は何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度^{いくたび}か手を着けようとしては手を引つ込めた卒業論文を、いよいよ

本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。

二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、わたくしぜひとこの論文を
成規通りせいぎどお四月いっぱいに書き上げてしまわなければならなかつ
た。二、三、四と指を折つて余る時日を勘定して見た時、私は
少し自分の度胸うたぐを疑つた。他のものはよほど前から材料を蒐め
たり、ノートを溜めたたりして、余所目よそめにも忙しいそがそうに見えるの
に、私だけはまだ何にも手を着けず_にいた。私にはただ年が改
まつたら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心
でやり出した。そうして忽ちたちま動けなくなつた。今まで大きな問
題を空くうに描えがいて、骨組みだけはほぼでき上つてゐるくらいに考

えていた私は、頭を抑えて^{おさ}悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に^{まと}纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちよつと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうといった。狼狽^{ろうばい}した気味の私は、早速^{さつそく}先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫^{ごう}も私を指導する任に当ろうとしなかつた。

「近頃^{ちかごろ}はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後^ごどういふ訳か、前ほどこの方面に興味が働かなくなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしよう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしょう。まあ早くいえば老

い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味くみを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応てごたえもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずには帰つた。

それからの私はほとんど論文に崇たられた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業した友達について、色々な様子を聞いてみたりした。そのうちの一人いちにんは締切しめきりの日に車で事務所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたといつた。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持つて行つたため、危あやうく跳ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたといつた。私は不安を感じると共に度胸すを据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、

高い本棚のあちらこちらを見廻みまわした。私の眼は好事家こうずかが骨董こつとうでも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向むきを南へ更かえて行つた。それが一仕切ひとしきり経たつと、桜の噂うわさがちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭むちうたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居またを跨またがなかった。

二十六

私わたくしの自由になつたのは、八重桜やえざくらの散つた枝にいつしか青い葉が霞かすむように伸び始める初夏の季節であつた。私は籠かごを抜け出した小鳥の心をもつて、広い天地を一目ひとめに見渡しながら、自由

に羽搏はばたきをした。私はすぐ先生の家うちへ行つた。枳殼からたちの垣が黒ずんだ枝の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉うれしそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですな」といった。私は「お蔭かげでようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事けつりようがすでに結了して、これから先は威張つて遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋ちやうちやう々した。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうです

か」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」
「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。

一時間の後、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもつて、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、

この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖とぎされたように蒨鬱こんもりした小高い一構ひとかまえの下に細い路みちが開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りのぼになつてゐる入口を眺ながめて、「はいつてみようか」といった。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。

植込うえこみの中をうねりして奥へ上ると左側ひだりに家うちがあつた。明け放しやうじつた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先のきりぎに据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅つづじが燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色かばいろの丈たけの高いのを指して、「これは霧島きりしまでしょう」といった。芍薬しやくやくも十坪とつぽあまり一面に植え付けられていたが、まだ季節きせうが来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬ばくやく畠はたけの傍そばにある古びた縁台えんたいのようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼い透あおき徹するような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺ながめると、一々違っていた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗いただきの頂いただきに投げ被かぶせてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

二十七

わたくし

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪^{つめ}はじで弾きながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

からだ

身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよつぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

でんち

「どのくらいって、山と田地が少しあるぎりで、金なんかまるでないんでしょう」

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つた。その後この疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもつていらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは小人数こにんずであつた。したがって住宅も決して広くはなかつた。け

れどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のものではなかつた。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じやありません。財産家ならもつと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こ
ういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき
始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐ
に立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとりごとのようであつた。それですぐ後あとに尾つ

いて行き損なつた私は、つい黙つていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病氣はその後どうなりました」

私は父の病氣について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送つてくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゆせきであつたが、病氣の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えふるが少しも筆の運びを乱していなかった。

「何ともいつて来ませんが、もう好いんでしよう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やつぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしよう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんたままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに氣が付くはずがなかつた。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれど

も。君のお父さんが達者なうちに、貰^{もら}うものはちゃんと貰^{もら}つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

わたくし

私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしる母にしる、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに实际的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣^{ことばづか}いをするのが氣に触^{さわ}つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口気は珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも氣に掛けちゃいけません」と私は弁解した。

「君の兄弟きょうだいは何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじや叔母おばの様子を問いなどした。そうして最後にこ
ういった。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者いなかものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮ついきゅうに苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。
こころ

それから、君は今、君の親戚しんせきなぞの中に、これといつて、悪い人間うちはいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油断ができません」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろうしの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍そばに、熊笹くまのぞくが三坪みつばほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十とおぐらいの

こども
小供が馳^かけて来て犬を叱^{しか}り付けた。小供は徽章^{きしょう}の着いた黒い帽子を被^{かぶ}ったまま先生の前へ廻^{まわ}つて礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、家^{うち}に誰^{だれ}もいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日^{こんち}はつて、断つてはいつて来ると好^よかつたのに」

先生は苦笑した。懷中^{ふところ}から褳^{がまぐち}口を出して、五錢の白銅^{はくどう}を小供の手に握らせた。

「おつかさんにそういつとくれ。少しここで休まして下さい
て」

小供は伶俐りこうそうな眼に笑いを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥候長せつこうちやうになつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅つづじの間を下の方へ駈け下りて行つた。犬も尻尾しつぽを高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行つた方へ駈けていった。

二十九

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事ができなくなつたので、私はついにその要領を得ないでしまった。先生の氣にする財産うんぬん云々の掛念けねんはその時の私わたくしには全くなかつた。私の性質として、また私の境遇からいつて、その時の私には、そ

んな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また實際その場に臨まないためでもあつたろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間際に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解^{わか}らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた。

犬と小供^{こども}が去つたあと、広い若葉の園は再び故^{もと}の静かさに歸つ

た。そうして我々は沈黙に鎖^とぎされた人のようにしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失つて来た。眼の前にある樹^きは大概^{かえで}楓であつたが、その枝に滴^{したた}るように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い

往來を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日えんいちへでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想めいそうから呼息いきを吹き返した人のように立ち上がった。

「もう、そろそろ帰りましょう。大分日だいぶんが永くなつたようだが、やつぱりこう安閑としてゐるうちには、いつの間にか暮れて行くんだね」

先生の背中には、さつき縁台の上に仰向きあおむに寝た痕あとがいつばい着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとうございます。脂やにがこびり着いてやしませんか」

「綺麗きれいに落ちました」

「この羽織はつい此間こないだ拵しらえたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難う」

二人はまただらだら坂さかの中途にある家うちの前へ来た。はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかった縁えんに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大きな金魚鉢の横から、「どうもお邪魔じやまをしました」と挨拶あいさつした。お上さんは「いいえお構かまい申しも致しませんで」と礼を返した後あと、先刻さつき小供こどもにやった白銅はくどうの礼を述べた。

門口かどぐちを出て二、三町ちやう来た時、私はついに先生に向かつて口を切った。

「さきほど先生のいわれた、人間は誰だれでもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」
「意味といって、深い意味もありません。——つまり事実なんです。理屈さしつかじゃないんだ」

「事実で差支さしつかえありませんが、私の伺いたいののは、いざという

間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機じきの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風ふうに。

「金かねさ君。金を見ると、どんな君子くんしでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つまらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だつて、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立ち留どまつた私の顔を見て、先生はこういつた。

三十

その時の私は腹わたくしの中で先生を憎らしく思った。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こだわる様子を見せなかった。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払った歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹ごうはらになった。何とかいつて一つ先生をやっ付けてみたくなつて来た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさつき少し昂奮こうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休

んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかった。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的が外れたようにも感じた。仕方がないから後はいわない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立つていた。

「やあ失敬」

先生はこういつてまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑やかになつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つてきた。それでも所々宅地の隅な

どに、豌豆えんどうの蔓つるを竹にからませたり、金網かなあみで鶏にわとりを囲い飼いにしたりするのが閑静かながに眺められた。市中から帰る駄馬だばが仕切りなく擦すれ違つて行つた。こんなものに始終氣を奪とられがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りあともとどをした時、私は實際それを忘れていた。「私は先刻さつきそんなに昂奮したように見えたんですか」

「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

「いや見えても構わない。實際昂奮こうふんするんだから。私は財産の事をいうときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年たつても二十年たつても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いた

のは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力しゅうじやくりよくをいまだかつて想像した事さえなかった。私は先生をもつと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処ところに、私の懐かしみの根を置いていた。一時の気分で先生にちよつと盾たてを突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなつた。先生はこういつた。

「私は他ひとに欺あざむかれたのです。しかも血のつづいた親戚しんせきのものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否いなや許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供こどもの時から今日きょうまで背負しよわされている。恐らく死ぬまで背負

わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事ができないんだから。しかし私はまだ復讐ふくしゅうをしない。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思う」

私は慰藉いしやの言葉さえ口へ出せなかった。

三十一

その日の談話もついにこれぎりで発展せずになった。私はむしろ先生の態度に畏縮いしゆくして、先へ進む気が起らなかったのがある。

二人は市の外れから電車に乗ったが、車内ではほとんど口を聞はきかず

かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、また変つていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」といった。私は笑つて帽子を脱とつた。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうかうたぐと疑つた。その眼、その口、どこにも厭世的えんせいてきの影は射さしていなかつた。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々まゝあつたといわなければならない。先生の談話は時として不得要領ふとくようりょうに終つた。その日二人の間に起つた郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏うちに残つ

た。

無遠慮な私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこういった。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解^{わか}つてくせに、はつきりいつてくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していraftしやいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏^{まと}め上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉^{ことごと}くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられたただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻烟草まきタバコを持っていたその手が少し顫ふるえた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目まじめなんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を許あはいてもですか」

許くという言葉が、突然恐ろしい響きひびをもつて、私の耳を打つた。私は今私の前に坐すわっているのが、一人の罪人ざいにんであつて、断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼あお

かった。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果^{いんが}で、人を疑^{うたぐ}りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人であいいから、他^{ひと}を信用して死にたいと思っている。あなたはそれたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」

私の声は顫えた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは

構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増ましかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」

私は下宿へ歸つてからも一種の圧迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭かびくさくなつた古い冬服を行李こうりの中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであつた。私は風の通らない厚羅紗あつらシャの下に密封された自分の身体からだを持て余

した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしよぐしよになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体はだかになった。下宿の二階の窓を

あけて、遠眼鏡とおめがねのようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見

えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになつて、室へやの真中に寝そ

べつた。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立つて一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御馳走ごちそうに招かれて行つた。これはもし卒業したらその日の晩餐ばんさんはよそで喰くわずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の縁えん近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊のりの硬い卓布テーブルクロスが美しくかつ清らかに電燈の光を射返いかえしていた。先生のうちで飯めしを食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸はしや茶碗ちやわんが置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた。「カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを用いるくらいなら、一層いっそう始めはじから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」

こういわれてみると、なるほど先生は潔癖であつた。書斎なども実に整然きちりと片付いていた。無頓着むとんじやくな私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつた。

「先生は癩性かんしやうですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事が

あつた。それを傍そばに聞いていた先生は、「本当をいうと、私は精神的に癩性しやうふんなんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」といつて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗にいう神経質という意味か、または倫理的に潔癖けつへきだという意味か、私には解わからなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓布たくふの前に坐すわつた。奥さんは二人を左右に置いて、独り庭ひとの方を正面にして席を占めた。

「お目出とう」といつて、先生が私のために杯さかずきを上げてくれた。私はこの盃さかずきに対してそれほど嬉しい氣うれを起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しきをもつていながつたのが、一つの源因げんいんであつた。けれども先生のいい

方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかった。先生は笑って杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の悪いアイロニーを認めなかった。同時に目出たいという真情も汲み取る事ができなかった。先生の笑いは、「世間はこんな場合によくお目出とうといいたがるものですね」と私に物語っていた。

奥さんは私に「結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」といつてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。

「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

「どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「ええ、たしかしまつてあるはずですが」

卒業証書の在処は二人ともよく知らなかった。

三十三

飯めしになった時、奥さんは傍そばに坐すわっている下女げじよを次へ立たせて、自分で給仕きゆうしの役をつとめた。これが表立たない客に対する先生せんせいの家の仕来りしきたりらしかった。始めの一、二回は私も窮屈きうくつを感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗ちやわんを奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。

「お茶？ ご飯はん？ ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事をいうことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戲からかわれるほど食欲が進まなかつた。

「もうおしまい。あなた近頃大変小食ちかごろ しょうしょくになったのね」

「小食になったんじやありません。暑いんで食われないんです」
奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子みずがしを運はこばせた。

「これは宅うちで拵こしらえたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞ふるまうだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更かえてもらった。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際しきいぎわで背中を障子しょうじに靠もたせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的あてもなかった。返事にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今

度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいちどれが善^いいか、どれが悪^いいか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思ひます」

「それもそうね。けれどもあなたは必竟^{ひつきよう}財産があるからそんな呑^{のん}気な事をいつていられるのよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちやいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があつた。私は腹の中で奥さんのいう事実を認めた。しかしこういつた。

「少し先生にかぶれたんでしよう」

「碌^{ろく}なかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構わないから、その代りこの間いった通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」

私は先生といつしよに、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅つつじの咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮こうふんした語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄すじい言葉であつた。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、お宅たくの財産はよッぽどあるんですか」

「何だつてそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしょう」

「でもどのくらいあつたら先生のようにしていただけるか、宅へ
帰つて一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草タバコを吹かしていた。相手
は自然奥さんでなければならなかった。

「どのくらいつてほどありやしませんわ。まあこうしてどうか
こうか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜
いとして、あなたはこれから何か為なさらくつちや本当にいけ
ませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちや……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

わたくし

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇乞いの言葉を述べた。

「また当分お目にかかれませんか」

「九月には出ていらつしやるんでしようね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。

こころ

「まあ九月頃ごろになるでしょう」

「じゃずいぶんご機嫌きげんよう。私たちもこの夏はことによるとど

こかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そうだから。行つたらまた絵端書えはがきでも送つて上げましょう」

「どちらの見当です。もしいらつしやるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑つて聞いていた。

「何まだ行くとも行かないとも極めていやしないんです」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病氣はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいつて来ない以上、悪くはないのだらうくらいに考えていた。

「そんなに容易たやすく考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症にようどくしやうが出ると、もう駄目だめなんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解わからなかった。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞か

なかつた。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいった。「毒が脳へ廻まわるようになる」と、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」

無経験な私は気味を悪がりながらも、にやにやしていた。

「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したって仕方ありません」

「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」

奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さんの事でも憶おもい出したのか、沈んだ調子でこういったなり下を向いた。私も父の運命が本当に気の毒になった。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静しず、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己おれの方がお前より前に片付くかな。大抵世間じや旦那だんなが先で、細君さいくんが後へ残るのが当り前のようになってるね」

「そう極きまった訳でもないわ。けれども男ほうの方はどうしても、それから年が上でしよう」

「だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくつちやならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩わづらった例ためしがないじやありませんか。そりやどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「え、きつと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするって……」

奥さんはそこで口籠くちごもった。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲かつたらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定ろうしょうふじょうつていうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談じょうだんらしくこういった。

わたくし

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固^{もと}より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極^{きま}つた年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父^{とう}さんやお母^{おん}さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなったのが」

「亡くなられた日ですか」

「まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だって続いて亡くなっちまったんですもの」

この知識は私にとって新しいものであった。私は不思議に思つた。

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮つた。

「そんな話はお止しよ。つまらないから」

先生は手に持った団扇うちわをわざとばたばたいわせた。そうして

また奥さんを顧みた。

「静しず、おれが死んだらこの家うちをお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面は他ひとのものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆みななお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰もらつても仕様がな

いわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになつて」

先生はいくらともいわなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍なんべんおつしやるの。後生ごしようだからもう好いい加減にして、おれが死んだら止よして頂戴ちやうだい。縁喜えんぎでもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いいじゃありませんか」

先生は庭の方を向いて笑った。しかしそれぎり奥さんの厭いやが

る事をいわなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。

「ご病人をお大事に」と奥さんがいった。

「また九月に」と先生がいった。

私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張つていた。私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被^{おほ}われているその梢^{こずえ}を見て、来たるべき秋の花と香を想^{おも}い浮べた。私は先生の宅^{うち}とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、いつしよに記憶していた。私が偶然その樹^きの前に立つて、再びこの宅の玄関を跨^{また}ぐべき次の秋に思いを馳^はせた時、今まで格子の間から射^さしていた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいつたらしかつ

た。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調^{ととの}える買物もあつたし、ご馳走^{ちそう}を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑^{にぎ}やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女^{なんによ}がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場^{バー}へ連れ込んだ。私はそこで麦酒^{ビール}の泡のような彼の気^きを聞かされた。私の下宿へ歸つたのは十二時過ぎであつた。

三十六

こころ

私^{わたくし}はその翌日^{よくじつ}も暑^{あつ}さを冒^{おか}して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないうちに考えていたのが、

いざとなると大變臆劫おつくうに感ぜられた。私は電車の中で汗を拭ふきながら、他の時間ひとと手数に氣の毒という觀念をまるでもつていない田舎者いなかものを憎らしく思つた。

私はこの一夏ひとなつを無為に過ぐす氣はなかつた。国へ歸つてからの日程というようなものをあらかじめ作つておいたので、それを履行りこうするに必要な書物も手に入れなければならなかつた。私は半日を丸善まるぜんの二階で潰つぶす覺悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立つて、隅から隅まで一冊ずつ点検して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟はんえりであつた。小僧にいうと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上価あたが極めて不定であつた。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつ

たり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえって大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあつた。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんわづらを煩わさなかつたかを悔いた。

私は鞆かばんを買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具などがぴかぴかしているの、田舎ものを威嚇おどかすには充分であつた。この鞆を買うという事は、私の母の注文いっさいであつた。卒業したら新しい鞆を買つて、そのなかに一切の土産みやげものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡りようけんが解わからないというよりも、その言葉が一種の滑稽こっけいとして訴えたのである。

私は暇乞いいとまごをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかった。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覺悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故とてもとのような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあらうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりいかにで田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾いたの至りであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際心に浮ぶ

ままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。

「どっちが先へ死ぬだろう」

私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもつて答える事ができないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。(死に近づきつつある父を国元に控えな

がら、この私がどうする事もできないように)。私は人間を果敢^{はか}ないものに観じた。人間のどうする事もできない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。

中 両親と私

一

宅^{うち}へ歸つて案外に思つたのは、父の元氣がこの前見た時と大して變つていない事であつた。

「ああ歸つたかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だつた。ちよつとお待ち、今顔を洗つて来るから」

父は庭へ出て何かしていたところであつた。古い麦藁^{むぎわらぼう}帽の後

ろへ、日除ひよけのために括り付けた薄汚うすぎたないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻まわって行つた。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮わたくしした。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍なんべんも繰り返した。私は心のうちでこの父の

喜びと、卒業式のあつた晩先生うちの家の食卓で、「お目出とう」と

いわれた時の先生の顔付かおつきとを比較した。私には口で祝つてくれ

ながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもない

ものを珍しそうに嬉うれしがる父よりも、かえって高尚に見えた。

私はしまいに父の無知から出る田舎臭いなかくさいところに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒

業するものは毎年何百人だつてあります」

私はついにこんな口の利ききようをした。すると父が変な顔を
した。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりや卒業
は結構に違いないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。
それがお前に解わかつていてくれさえすれば、……」

私は父からその後を聞あとこうとした。父は話したくなさそうで
あつたが、とうとうこういつた。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知つ
てる通りの病氣みつきだろう。去年の冬お前に会つた時、ことによる
ともう三月みつきか四月よつきぐらいなものだろうと思つていたのさ。それ
がどういふ仕合せしあわせか、今日までこうしている。起居たちいに不自由な
くこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しい

のさ。せつかく丹精^{たんせい}した息子が、自分のいなくなつた後^{あと}で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しい^{うれ}だろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高^{たか}が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解^とつたかい」

私は一言^{いちごん}もなかった。詫^{あや}まる以上に恐縮^{うつつむ}して俯向^{うつむ}いていた。

父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思ひ定めていたとみえる。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚^{おろ}かものであつた。私は鞆^{かばん}の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに圧^おし潰^{つぶ}されて、元

の形を失っていた。父はそれを鄭寧^{ていねい}に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」

「中^{しん}に心でも入れると好^よかつたのに」と母も傍^{かたわら}から注意した。

父はしばらくそれを眺^{なが}めた後^{あと}、起^たつて床^{とこ}の間の所へ行つて、

誰^{だれ}の目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私

ならず何とかいうはずであつたが、その時の私はまるで平生^{へいぜい}

と違つていた。父や母に対して少しも逆らう氣が起らなかつた。

私はだまつて父の為^なすがままに任せておいた。一旦癖^{いつたん}のついた

鳥^{とり}の子紙^{こがみ}の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な

位置に置かれるや否^{いな}や、すぐ己^{おの}れに自然な勢^{いきお}いを得て倒れよう

とした。

わたくし

私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大方おおかた好くおなりなんだろう」

母は案外平気であつた。都会から懸かけ隔たつた森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であつた。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異いな感いじを抱いだいた。

「でも医者はある時到底とてもむずかしいって宣告したじゃありませんか」

「だから人間の身体からだほど不思議なものはないと思うんだよ。あ

れほどお医者が手重ておもくいったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思つてたんだがね。それ、あの氣性だろう。養生はしなさるけれども、強情じやうじやうでねえ。自分が好いいと思ひ込んで、なかなか私わたしのいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前歸つた時、無理に床とこを上げさして、髭ひげを剃そつた父の様子と態度とを思ひ出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山きやうさん過ぎるからいけないんだ」といつたその時の言葉を考へてみると、満更母まんざらばかり責める氣にもなれなかつた。「しかし傍はたでも少しは注意しなくっちゃ」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつた。ただ父の病やまいの性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその

大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やつぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いた。

私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった。父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「もつともだ。お前のいう通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひつきよう己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それぞ覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでいるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思っ

たのが、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそういつていましたぜ」

「そりゃ、お前、口でこそそうおいだけれどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思つてお出のだよ」

「そうでしょうか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もつとも時々
はわたしにも心細いような事をおいいだがね。おれもこの分じや
もう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一
人でこの家うちにいる気かなんて」

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い
広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後あと
は、そのままで立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母
は何というだろうか。そう考える私はまたここの土を離れて、

東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰うものは、分けて貰って置けという注意を、偶然思い出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬっていう人に死んだ試しはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬっていういいながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙ってる丈夫の人の方が剣呑さ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐なような母の言葉を黙然と聞いていた。

三

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間

に起つた。私は帰つた当日から、あるいはこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗あんにそれを恐れていた。私はすぐ断ことわつた。

「あんまり仰山ぎょうさんな事は止よしてください」

私は田舎いなかの客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後の目的としてやつて来る彼らは、何か事があれば好いいといつた風ふうの人ばかり揃そろつていた。私は子供の時から彼らの席に待じするのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛はいつそう甚はなはだしいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙やひな人を集めて騒ぐのは止せともいいかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

「仰山仰山とおいだが、些ちつとも仰山じゃないよ。生涯に二度

とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為しでない」

母は私が大学を卒業したのを、ちようど嫁でも貰もらったと同じ程度に、重く見ているらしかった。

「呼ばなくつても好いいが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。實際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であつた。

「東京と違つて田舎は蒼蠅うるさいからね」

父はこうもいった。

「お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我がを張る訳にも行かなかつた。どうしても二人の都合の好いいようにしたらと思ひ出した。

「つまり私のためなら、止よして下さいというだけなんです。陰で何かいわれるのが厭いやだからというご主意しゅいなら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強いて主張したって仕方ありません」

「そう理屈をいわれると困る」

父は苦い顔をした。

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だつて世間への義理ぐらいは知つているだろう」

母はこうなると女だけにしどろもどろな事をいつた。その代り口数からいうと、父と私を二人寄せてもなかなか敵かなうどころではなかった。

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなつていけない」

父はただこれだけしかいわなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生へいぜいから私に對してもつてゐる不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張かどばつたところに気が付かずに、父の不平の方ばかりを無理のように思つた。

父はその夜よまた氣を更かえて、客を呼ぶなら何日いっにするかと私の都合を聞いた。都合の好いいも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起ねおきしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であつた。私はこの穏やかな父の前に拘泥こだわらない頭を下げた。私は父と相談の上招待しょうだいの日取りを極きめた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起つた。それは明治天皇めいじてんのうのご病氣の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の田舎家いなかやのうちに多少の曲折を経

てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払った。

「まあ、ご遠慮申した方がよからう」

眼鏡めがねを掛けて新聞を見ていた父はこういった。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸ぎようこうになつた陛下を憶おもい出したりした。

四

小勢こぜいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私わたくしは行李こうりを解いて書物を繙ひもとき始めた。なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくつて行く方が、気に張

ころ

りがあつて心持よく勉強ができた。

私はややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあつた。眼が覚めると、蝉せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急に八釜やかましく耳の底を搔かき乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがきまたは長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残つていた。あるものは遠い故郷に帰つていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私は固もとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ帰つてから以後の自分といううなものを題目にして書き綴つづつたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかと思うたぐつた。先生が奥さんといつ

しよに宅うちを空あける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人がどこから来て、留守番をするのが例になっていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類しんれいと思い違えていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向いっこう音信の取り遣やりをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の方は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆ばあさんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの氣転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は

能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。

父はこの前の冬に帰つて来た時ほど将棋を差したがらなくなつた。将棋盤はほこりの溜つたまま、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下のご病氣以後父は凝と考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持つて来てくれた。

「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」
父は陛下のことを、つねに天子さまといつていた。

「勿体ない話だが、天子さまのご病氣も、お父さんのとまあ似たものだろうな」

こういう父の顔には深い掛念けねんの曇りくもがかかっていた。こういわれる私の胸にはまた父がいつ斃たおれるか分らないという心配がひらめいた。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下くだらないものでも、まだこうしていられるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己おのれに落ちかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病氣を怖こわがつてるんですよ。お母さんのおつしやるように、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」
母は私の言葉を聞いて当惑そうな顔をした。

「ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭ふいた。

父の元氣は次第に衰えて行つた。私を驚かせたハンケチ付きの古い麦藁帽子が自然と閑却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して氣の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという氣が起つた。私は父の健康についてよく母と話し合つた。

「まったく氣のせいだよ」と母がいつた。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかつた。

「氣じゃない。本当に身体が悪かないんでしようか。どうも氣

分より健康の方が悪くなつて行くらしい」

私はこういつて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。

「今年の夏はお前も詰つまらなかるう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの身体からだもあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといいだしたのは、それから一週間後ごであつた。そうしていよいよと極きめた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎いなかに帰つた私は、お蔭かげで好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていない

らしかった。

ほうぎよ

崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「あ、ああ」といった。

「ああ、ああ、天子様もとうとうおかくれになる。己も……」
おれ

父はその後をいわなかった。
あと

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を
はたざお たま

包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の

ずんはば

横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のな

い空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁

わら

で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその

藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹

ところどころ でこぼこ

さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、
白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色と

を眺^{なが}めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分^{だいぶん}趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつた。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへはいった。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でぎわわしているなかに、一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦^{うず}の中に、自然と捲^まき込まれている事に気が付かなかつた。しばらくすれば、その灯^ひもまたふつと消え

てしまふべき運命を、眼めの前に控えているのだとは固もとより気が付かなかつた。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執とりかけた。私はそれを十行ばかり書いて已やめた。書いた所は寸々すんずんに引き裂いて屑籠くずかごへ投げ込んだ。(先生に宛あててそういう事を書いて仕方がないと思つたし、前例ちように徴さしてみると、とても返事をくれそうになかつたから)。私は淋さびしかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いいと思うのであつた。

六

八月の半なかばごろになつて、私わたくしはある朋友ほうゆうから手紙を受け取つ

た。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は經濟の必要上、自分でそんな位地を探し廻る男であつた。この口も始めは自分の所へかかつて来たのだが、もつと好い地方へ相談ができたので、余つた方を私に譲る氣で、わざわざ知らせて来てくれたのであつた。私はすぐ返事を出して断つた。知り合いの中には、ずいぶん骨を折つて、教師の職にありつきたがつているものがあるから、その方へ廻してやつたら好^よかろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断つた事に異存はないようであつた。

「そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」

こういつてくれる裏に、私は二人が私に対してもつてゐる過分な希望を読んだ。迂闊^{うかつ}な父や母は、不相当な地位と収入とを

卒業したての私から期待しているらしかったのである。

「相当の口つて、近頃ちかごろじゃそんな旨い口うまはなかなかあるものじゃ

ありません。ことに兄さんと私とは専門も違ちがうし、時代も違ちがうんだから、二人を同じように考えられちや少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行いつてくれなくつちやこつちも困る。人からあなたの所じのご二男にんは、大学を卒業なすつて何をしてお出いでですかと聞かれた時に返事ができないうじや、おれも肩身が狭いから」

父はしゅうめん面をつくつた。父の考えは、古く住み慣れた郷里から

外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼だれかれから、大学を卒業すればいくらぐらい月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円ぐらいなものだろうかといわれたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付

けたかつたのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体きたいな人間に異ならなかつた。私の方でも、実際そういう人間のような氣持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔けんかくの甚はなはだしい父と母の前に默然もくねんとしていた。

「お前いのよく先生先生という方かたにでもお願いしたら好いいじやないか。こんな時こそ」

母はこうより外ほかに先生を解釈する事ができなかつた。その先生は私に国へ帰つたら父の生きてゐるうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であつた。卒業したから、地位の周旋しゆせんをしてやろうという人ではなかつた。

「その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。

「何にもしてゐないんです」と私が答えた。

私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであつた。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやつていそうなものだがね」
父はこういつて、私を諷^{ふう}した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟^{ひつきやう}やぐざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。

「おれのような人間だつて、月給こそ貰^{もら}つちやいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうもいった。私はそれでもまだ黙つていた。

「お前のいうような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも
好いいからお出しな」

「ええ」

私は生返事なまへんじをして席を立つた。

七

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者うるさの来るた
びに蒼蠅うるさい質問を掛けて相手を困らす質たちでもなかった。医者たちの
方でもまた遠慮して何ともいわなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がい
なくなつた後あとのわが家いえを想像して見るらしかった。

「小供こどもに学問をさせるのも、好よし悪あしだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅うちへ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するためにに学問させるようなものだ」

学問をした結果兄は今遠国えんごくにいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴ぐちはもとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舎家いなかやの中に、たつた一人取り残されされるような母を描えがき出す父の想像はもとより淋さびしいに違いなかつた。

わが家いえは動かす事のできないものと父は信じ切つていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事のできないものと信じていた。自分が死んだ後あと、この孤独な母を、たつた一人伽藍堂がらんどうのわが家に取り残すのもまた甚はなはだしい不安であつた。それだのに、東京で好いい地位を求めろといつて、私を強しいたがる父の頭

には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭かげでまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力で求めつつあるごとくに装おわなくてはならなかつた。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精くわしく述べた。もし自分の力でできる事があつたら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思ひながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事もできまいと思ひながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向かつていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおつしやつた通り。ちよつと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかった。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他ひとが気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のよう
な感じがした。

「しかし手紙じゃ用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくっちゃ」

「そりやそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好いい口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」

「ええ。とにかく返事は来るに極きまってますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几帳面きちょうめんな先生を信じていた。私は先生

の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外れた。^{はず}先生からは一週間経つても何の音信もなかった。^{たより}

「大方どこかへ避暑にでも行っているんでしょう」^{おおかた}

私は母に向かって言訳^{いいわけ}らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強^しいても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎた。

九月始めになって、私はわたくしいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向かつて当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「ここにこうしていたって、あなたのおつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事をいった。

「無論口の見付かるまでで好いですから」ともいった。

私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。

「そりや僅わずかの間あいだの事だろうから、どうにか都合してやろう。その代り永くはいけないよ。相当の地位を得え次第独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとをいった。その中には、「昔の親は子に食わせてもらつたのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があつた。それらを私はただ黙つて聞いていた。

小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好よかつた。「お母さんに日を見てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私は父の前に存外ぞんがいおとなしかつた。私はなるべく父

の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。父はまた私を引き留めた。

「お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐つて、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蟬の声を聞いた。その声はこの間中聞いたのと違って、つくつく法師の声であつた。私は夏郷里に帰つて、煮え付くような蟬の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一

人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油
蟬の声がつくつく法師の声に変わると共に、私を取り巻く人の
運命が、大きな輪廻りんねのうちに、そろそろ動いているように思わ
れた。私は淋さびしそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙
を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶おもい浮べた。先生
と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の
上にも、連想の上にも、いつしよに私の頭に上のぼりやすかった。

私はほとんど父のすべてでも知り尽つくしていた。もし父を離れる
とすれば、情合じょうあいの上に親子の心残りがあるだけであつた。先生
の多くはまだ私に解わかつていなかった。話すと約束されたその人
の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとつ
て薄暗かつた。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで

行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であつた。私は母に日を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極めた。

九

わたくし
私がいよいよ立とうという間際になつて、（たしか二日前の夕方）の事であつたと思うが、父はまた突然引つ續り返つた。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入つたところであつた。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後ろから抱かれてゐる父を見た。それでも座敷へ伴つて戻つた時、父はもう大丈夫だといった。念のために枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷し

ていた私は、九時頃ごろになつてようやく形かたばかりの夜食を済よました。

翌日よくじつになると父は思つたより元氣が好よかつた。留とめるのも聞かずに歩いて便所へ行つたりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かつていつたと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいつた通りまあ大丈夫であつた。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思つた。しかし医者はまだ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然はつきりした事を話してくれなかつた。私は不安のために、出立しゅつたつの日が来てもついに東京へ立つ氣が起らなかつた。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。

「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背戸せどへ下りたりする元氣を見ている間だけは平氣でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり氣を揉もんだりした。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が聞いた。

「ええ、少し延のばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇ちゆうちよした。そうだといえ、父の病氣の重いの

を裏書きするようなものであつた。私は父の神経を過敏にしたくなかつた。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかつた。

「氣の毒だね」といつて、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいつて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支さしかえないように、堅く括くられた

ままであつた。私はぼんやりその前に立つて、また縄を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ごした。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥あんがを命じた。

「どうしたものだろね」と母が父に聞こえないような小さな声で私にいった。母の顔はいかにも心細そうであつた。私は兄いもとと妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父にはほとんど何の苦悶くもんもなかつた。話をするところなどを見ると、風邪かぜでも引いた時と全く同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍はたのものが、注意しても容易にいう事を聞かなかつた。「どうせ死ぬんだから、旨いものうまでも食つて死ななくっちゃ」私には旨いものという父の言葉が滑稽こっけいにも悲酸ひさんにも聞こえた。

父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかったのである。夜に入いってかき餅もちなどを焼いてもらってぼりぼり嚙かんだ。「どうしてこう渴かわくのかね。やつぱり心しんに丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していいところにかえつて頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使わない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父おじが見舞に來たとき、父はいつまでも引き留めて歸さなかつた。淋さむしいからもつといってくれというのが重おもな理由であつたが、母や私が、食べただけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。

父の病氣は同じような状態で一週間以上つづいた。わたくし私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛あてで出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、おそらくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信たよりだろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼せまらないうちに呼び寄せる自由は利きかなかつた。といつて、折角都合して来たには来たが、間まに合わなかつたといわれるのも辛つらかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。

「そう判然はつきりした事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知していて下さい」

停車場のある町から迎えた医者には私にこういった。私は母と相談して、その医者まぐらもとの周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶あいさつする白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹かかっている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「今に癒なおつたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやつておくに限る」

母は仕方なしに「その時は私もいつしよに伴つれて行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。

時とするとまた非常に淋さみしがった。

「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやつてくれ」

私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもつていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍なんべんもそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑わらいを帯びた先生の顔と、縁喜えんぎでもないと耳を塞ふさいだ奥さんの様子とを憶おもい出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であつた。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であつた。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事ができなかった。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事をおっしゃつちやいけませんよ。今に癒なおつたら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといつしよに。今度いらつしやるときつと吃驚びっくりしますよ、変つてゐるんで。電車の新しい線路だけでも大變増ふえていますからね。電車が通るようになれば自然町並まちなみも変るし、その上に市区改正

もあるし、東京が凝^{じつ}としている時は、まあ二六時中一分もないといつていいくらいです」

私は仕方がないからいわないでいい事まで喋^{しゃべ}舌^{しやべ}つた。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

病人があるので自然家^{いえ}の出入りも多くなつた。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらいの割で代る代る見舞に來た。中には比較的遠くにいて平生疎遠^{へいぜい}なものもあつた。「どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘠^やせていないじゃないか」などといつて帰るものがあつた。私の歸つた当時はひっそりし過ぎるほど静かであつた家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病氣は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。私は母や伯父^{おじ}と相談して、とうとう兄

と妹いもとに電報を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知しらせがあつた。妹はこの前懷妊かいにんした時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねていい越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかつた。

十一

こうした落ち付きのない間にも、私わたくしはまだ静かに坐る余裕をもつていた。偶たまには書物を開けて十頁ページもつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦いったん堅く括くくられた私の行李こうりは、いつの間にか解かれてしまった。私は要いるに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極きめた、この夏中

の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三がさんいち一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思った通り仕事の運ばない例もためし少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭いやな氣持に抑おさえ付けられた。

私はこの不快の裏うちに坐りながら、一方に父の病氣を考えた。父の死んだ後あとの事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思ひ浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺ながめた。

私が父の枕元まくらもとを離れて、独り取り乱した書物の中に腕組みをしているところへ母が顔を出した。

「少し午眠ひるねでもおしよ。お前もさぞ草臥くたびれるだろう」
母は私の氣分を了解していなかつた。私も母からそれを予期

するほどの子供でもなかった。私は単簡^{たんかん}に礼を述べた。母はまだ室^{へや}の入口に立っていた。

「お父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寝てお出^{いで}だよ」と母が答えた。

母は突然はいつて来て私の傍^{そば}に坐^{すわ}った。

「先生からまだ何ともいつて来ないかい」と聞いた。

母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するよ^うな返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得^{こころえ}があつて母を欺^{あざむ}いたと同じ結果に陥^{おち}った。

「もう一遍^{いっぺん}手紙を出してご覧な」と母がいった。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭^{いと}うような私ではなかった。けれどもこういう用件

で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱しかられたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙はるかに恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰もらえないのも、あるいはそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。

「手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒らちは明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼まわんで廻まわらなくっちゃ」

「だつてお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」

「だから出やしません。癒なほるとも癒なほらないとも片付かないうち
は、ちゃんとこうしているつもりです」

「そりゃ解わかり切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ほうちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れ^{あわ}んだ。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解できなかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のあるごとくに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地^{すきま}があるのかしらと疑^{うたぐ}った。その時「実はね」と母がいい出した。

「実はお父さんの生きてお出^{いで}のうちに、お前の口が極^{きま}つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥^{たし}かなら気も慥かなんだから、ああしてお出^{いで}のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」

憐れな私は親孝行のできない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。

十二

兄が帰つて来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措おいても新聞だけには眼を通す習慣であつたが、床とこについてからは、退屈のため猶更なおさらそれを読みたがつた。母も私も強しいては反対せず、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「そういう元気なら結構なものだ。よつぽど悪いかと思つて来たら、大変好いいようじゃありませんか」

兄はこんな事をいいながら父と話をした。その賑にぎやか過ぎる調子が私にはかえつて不調和に聞こえた。それでも父の前を外はずして私と差し向いになつた時は、むしろ沈んでいた。

「新聞なんか読ましちやいけないか」

「私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」

兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「よく解るのかな」といった。兄は父の理解力が病気のために、平生よりはよっぽど鈍にぶっているように観察したらしい。

「そりや慥たしかです。私はさつき二十分ばかり枕元まくらもとに坐すわって色々話してみたが、調子の狂ったところは少しもないです。あの様子じやことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」

兄と前後して着いた妹いもの夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。「身体からだが身体だからむやみに汽車になんぞ乗って揺ゆれない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、かえつてこつちが心配だから」といつていた。「なに今に治つたら赤ん坊の顔でも見

に、久しぶりにこつちから出掛けるから差支さしつかえない」ともいつていた。

のぎだいしように
乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知った。
「大變だ大變だ」といった。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。

「あの時はいよいよ頭が変になったのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私にいつた。「私も実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。

その頃ころの新聞は實際いなか田舎ものには日ごとに待ち受けられるよ
うな記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧ていねいにそれを読
んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へやへ持つて来て、残
らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、そ
れから官女かんじよみたような服装なふりをしたその夫人の姿を忘れる事がで

きなかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震さいちゆうわせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。洋服を着た人を見ると犬が吠ほえるような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取った母は、はたして驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。

「何だい」といつて、私の封を開くのを傍そばに立つて待っていた。電報にはちよつと会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあつた。私は首を傾けた。

「きつとお頼たのもうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私もあるいはそうかも知れないと思つた。しかしそれにしては少し変だとも考えた。とにかく兄や妹いもの夫まで呼び寄せた私

が、父の病氣を打遣^{うちや}つて、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。できるだけ簡略な言葉で父の病氣の危篤^{きとく}に陥りつつある旨^{むね}も付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委細^{いさい}手紙として、細かい事情をその日のうちに認^しめて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切った母は、「本当に間^まの悪い時は仕方のないものだね」といつて残念そうな顔をした。

十三

私^{わたくし}の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とかいつて来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛^{あて}で届いた。それには来ないで

もよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。

「おおかた大方手紙で何とかいつてきて下さるつもりだろうよ」

母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはばかり解釈しているらしかった。私もあるいはそうかも考えたが、先生の平生から推おしてみると、どうも変に思われた。「先生が口を探してくれる」。これはあり得うべからざる事のように私には見えた。

「とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」

私は母に向かってこんな分り切った事をいった。母はまたもつともらしく思案しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈

する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。

その日はちょうど主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣腸かんちようなどをして帰って行つた。

父は医者から安臥あんがを命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚だしはなはくそれを忌み嫌つたが、身体からだが利かないので、やむを得ずいやや床とこの上で用を足した。それが病氣の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るふに従つて、無精な排泄はいせつを意としなはたいようになつた。たまには蒲団ふとんや敷布を汚して、傍はたのものが眉まゆを寄せるのに、当人はかえつて平氣でいたりした。もつとも尿の量は病氣の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを

苦しした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがるだけで、咽喉のどから下へはごく僅わずかしか通らなかつた。好きな新聞も手に取る氣力がなくなつた。枕まくらの傍そばにある老眼鏡ろうがんきようは、いつまでも黒い鞆さやに納められたままであつた。子供の時分から仲の好かつた作さんさくという今では一里りばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」といつて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。

「作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己おれはもう駄目だめだ」

「そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるしき、子供はなしき。ただこうして生きているだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじや

ないか」

かんちよう

浣腸をしたのは作さんが来てから二、三日あとの事であつた。

父は医者のお蔭かげで大変楽になつたといつて喜んだ。少し自分の

寿命に対する度胸ができたという風ふうに機嫌が直つた。傍そばにいる

母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、

先生から電報のきた事を、あたかも私の位置が父の希望する通

り東京にあつたように話した。傍そばにいる私はむずがゆい心持が

したが、母の言葉を遮さへぎる訳にもゆかないので、黙つて聞いてい

た。病人は嬉うれしそうな顔をした。

「そりや結構です」と妹いもの夫もいった。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の

分らない曖昧あいまいな返事をして、わざと席を立つた。

十四

父の病氣は最後の一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇ちゆうちよするようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日くだ下るか、今日下るかと思つて、毎夜床とこにはいつた。

父は傍はたのものを辛つらくするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ樂であつた。要心のために、誰か一人ぐらゐずつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相當の時間めいめいに各自の寢床へ引き取つて差支さしかえなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸うなるような声を微かすかに聞いたと思ひ誤わたくしつた私は、一遍半夜ぺんよなかに床を抜け出して、念のため父の枕元まくらもとまで行つてみた事があつた。その夜よは母が起きている番に當つて

いた。しかしその母は父の横に肱^{ひじ}を曲げて枕としたなり寝入っていた。父も深い眠りの裏^{うち}にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ帰った。

私は兄といつしよの蚊帳^{かや}の中に寝た。妹^{いも}の夫だけは、客扱いを受けているせい^{せき}か、独り離れた座敷に入^いって休んだ。

「関^{せき}さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」

関というのはその人の苗字^{みょうじ}であつた。

「しかしそんな忙しい身体^{からだ}でもないんだから、ああして泊^とっていてくれるんでしよう。関さんよりも兄^{あに}さんの方が困^こるでしよう、こう長くなつちや」

「困^こつても仕方がない。外^{ほか}の事と違^{ちが}うからな」

兄^{あに}と床^{とこ}を並べて寝る私は、こんな寢物語をした。兄の頭にも

私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであつた。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚はばかつた。そうしてお互いにお互いがどんな事を思っているかをよく理解し合つていた。「お父さんは、まだ治る氣でいるようだな」と兄が私にいった。実際兄のいう通りに見えるところもないではなかつた。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うといつて承知しなかつた。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかつたのを残念がつた。その代り自分の病氣が治つたらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已やめになつて結構だ。おれの時には弱つたからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽あおら

れたその時の乱雑な有様を想い出して苦笑した。飲むものや食うものを強いて廻る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちはよく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へはいつてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったもので、また懸け隔たつた遠くにいたので、時からいつでも距離からいつても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になつていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違つた質問を兄に掛けた。

「一体家の財産はどうなつてゐるんだらう」

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産つていったところで金としては高の知れたものだらう」
母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしていた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

十五

「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明を忘れてしまふ兄に対して不

快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必竟ひつきよう聞いても解わからないというのであつた。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらふ必要はなかつた。けれども腹は立つた。また例の兄らしい所が出て来たと思つた。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであつた。けれども父が何もできないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰つまらん人間に限るといった風ふうの口吻こうふんを洩もらした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着な了簡だからね。人は自分のもっている才能をできるだけ働かせなくっちゃ嘘だ」

私は兄に向かつて、自分の使っているイゴイストという言葉の意味がよく解るか^{わか}と聞き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭^{かげ}で地位ができればまあ結構だ。お父さん^{とうさん}も喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事もできず、またそう口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑^{はやの}み込み^こでみんなにそう吹聴^{ふいちよう}してしまつた今となつてみると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の

口の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕ひんしている父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないように兄の手前、その他妹たimotoの夫だの伯父おじだの叔母おばだのの手前、私のちつとも頓着とんじやくしてない事に、神経を悩まさなければならなかった。

父が変な黄色いものも嘔はいた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者が帰り際に兄に向つていった事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解つていた。

「お前ここへ帰つて来て、宅うちの事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。

「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまたいった。兄は私を土にの臭においを嗅かいで朽ちて行つても惜しくなように見ていた。

「本を読むだけなら、田舎いなかでも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちようど好いいだろう」

「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私がいつた。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口ひとくちに斥しりぞけた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充みち満みちていた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくつちやなるまい」

「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合つた。

十六

父は時々囁語をいうようになった。

「乃木大將に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」

こんな言葉をひよいひよい出した。母は氣味を悪がつた。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがつた。氣のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の

中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「お光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起つて母を呼びに行つた。「何かご用ですか」と、母が仕掛けた用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何もいわない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「お光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前いきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかった。

「あんな憐れっぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷かつたんだよ」

母は父のために箒で背中をどやさされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、いつもとはまるで違つ

た気分で、母の言葉を父の記念かたみのように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言ゆいごんらしいものを口に出さなかつた。

「今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。

「そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好よし悪あしだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父おじに相談をかけた。伯父も首を傾けた。

「いいたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、といつて、こつちから催促するのも悪いかも知れず」

話はとうとう愚図ぐずぐず愚図ぐずになつてしまった。そのうちに昏睡こんすいが来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えてかえつて喜んだ。「まああゝして楽に寝られれば、傍はたにいる

ものも助かります」といった。

父は時々眼を開けて、誰だれはどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻さつきまでそこに坐すわっていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇やみを縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するようにみえた。母が昏睡こんすい状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。

そのうち舌が段々もつ纏れて来た。何かいい出しても尻しりが不明瞭ふめいりように了るために、要領を得ないでしまう事が多くあつた。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われないほど、強い声を出した。我々は固もとより不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。

「頭を冷やすと好いい心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水枕みずまくらを取り更かえて、それから新しい氷を入れた氷嚢ひょうのうを頭の上へ載のせた。がさがさに割られて尖とがり切った氷の破片が、嚢ふくろの中で落ちつく間、私は父の禿はげ上った額の外はずれでそれを柔らかに抑おさえていた。その時兄が廊下伝ろうかづたいにはいつて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並なみの状袋じょうぶくろにも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧ていねいに糊のりで貼はり付けであった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつ

つしんだ字で書いてあつた。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懷ふところに差し込んだ。

十七

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が厠わたくしかわやへ行こうとして席を立つた時、廊下で行き合つた兄は「どこへ行く」と番兵のような口調で誰すいか何した。

「どうも様子が少し変だからなるべく傍そばにいるようにしなくつちやいけないよ」と注意した。

私もそう思つていた。懷中かいちゆうした手紙はそのままにしてまた病

室へ歸つた。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父

はそのたびに首肯うなずいた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々お世話になります」

父はこういった。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺まくらべを取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人うちが立つて次の間まへ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席はすを外して、自分の室へやへ来た。私には先刻さつきふところ懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があつた。それは病人の枕元でも容易にできる所作しよさには違ひなかつた。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息ひといきにそこで読み通す訳には行かなかつた。私は特別の時間を偷ぬすんでそれに充あてた。

私は繊維の強い包み紙を引き搔くように裂さき破つた。中から

出たものは、縦横たてよこに引いた罫けいの中へ行儀よく書いた原稿ようこう様のものであつた。そうして封じる便宜のために、四よつ折おりに畳たたまれてあつた。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。

私の心はこの多量の紙と印氣インキが、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が氣にかかつた。私がこのかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父おじからか、呼ばれるに極きまつているという予覺よかくがあつた。私は落ち付いて先生の書いたものを読む氣になれなかつた。私はそわそわしながらただ最初の一頁ページを読んだ。その頁は下しものように綴つづられていた。

「あなたから過去を問いただされた時、答える事のできなかつ

た勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待つているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。したがって、それを利用できる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸^{いつ}するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘^{うそ}になります。私はやむを得ず、口でいふべきところを、筆で申し上げる事にしました」

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事ができた。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす氣遣^{きづか}いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執^とることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる氣になったのだ

ろう。先生はなぜ私の上京するまで待っていないだろう。
「自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後あとを読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を馳かけ抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。

十八

病室にはいつの間にか医者が来ていた。なるべく病人を楽にす

るという主意からまた浣腸かんちようを試みるところであつた。看護婦は昨夜ゆうべの疲れを休めるために別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔わたくしを見ると、「ちよつと手をお貸しか」といったまま、自分は席に着いた。私は兄に代つて、油紙あぶらがみを父の尻しりの下に宛あてがつたりした。

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元まくらもとに坐すわつていた医者は、浣腸かんちようの結果を認めた上、また来るといつて、歸つて行つた。歸り際ぎわに、もしもの事があつたらいつでも呼んでくれるようにわざわざ断つていた。

私は今にも変へんがありそうな病室を退しりぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛ゆつくりした気分になれなかつた。机の前に坐るや否いなや、また兄から大きな声で呼ばれそうではなかつた。そうして今度呼ばれれば、それが最後だという

畏怖いふが私の手を顫ふるわした。私は先生の手紙をただ無意味に頁ページだけ剥は繰ぐって行つた。私の眼は几帳面きちようめんに枠わくの中に簞はめられた字画じかくを見た。けれどもそれを読む余裕はなかつた。拾い読みにする余裕すら覚束おぼつかなかつた。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳たたんで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼にはいつた。

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」

私ははつと思つた。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結ぎようけつしたように感じた。私はまた逆に頁さかさをはぐり返した。そうして一枚に一句ぐらいずつの割で倒さかに読んで行つた。私は咄嗟とつさの間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字もんじを、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろう

とするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒^{さかさ}まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自^{じれつ}烈たそうに畳んだ。

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行つた。病人の枕^{まくら}辺は存^{ぞん}外^{がい}静かであつた。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招^{てまね}ぎして、「どうですか様子は」と聞いた。母は「今少し持ち合つてゐるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯^{うなず}いた。父ははつきり「有難う」といった。父の精神は存^{もろ}外^{ろう}朦朧としていかなかった。

私はまた病室を退^{しりぞ}いて自分の部屋に歸つた。そこで時計を見

ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立つて帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保につだらうか、そこをを判然はつきり聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎あいにく留守であつた。私には凝じつとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかつた。心の落ち付おきもなかつた。私はすぐ俵くるまを停車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片かみぎれを宛あてがつて、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであつたが、断らないで走るよりまだ増しだらうと思つて、それを急うちいで宅へ届けるように車夫しやふに頼んだ。そうして思い切つた勢いきおいで東京行きの汽車に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の

中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、ようやく始めからしま
いまで眼を通した。

下 先生と遺書

一

こころ

わたくし

「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。

東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、

たしか二度目に手に入いったものと記憶しています。私はそれを

読んだ時何となんかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げ

なければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあ

なたの依頼に対して、まるで努力をしなかったのです。ご承知
 の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたった一人で暮
 しているといった方が適切なくらいの私には、そういう努力を
 あえてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではあり
 ません。実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いいかと思
 い煩わずらっていたところなのです。このまま人間の中に取り残され
 たミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の
 私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつ
 としました。馳足かけあしで絶壁はじの端まで来て、急に底の見えない谷を
 覗のぞき込んだ人のように。私は卑怯ひきようでした。そうして多くの卑怯
 な人と同じ程度において煩悶はんもんしたのです。遺憾いかんながら、その時
 の私には、あなたというものがほとんど存在していなかったと
 いても誇張ではありません。一歩進めていうと、あなたの地

位、あなたの糊口ここうの資し、そんなものは私にとってまるで無意味なものでした。どうしても構かわなかつたのです。私はそれどころの騒さわぎでなかつたのです。私は状差じようさしへあなたの手紙を差したなり、依然として腕組うでぐみをして考え込んでいました。宅うちに相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といつて藻搔もがき廻まわるのか。私はむしろ苦々にくがしい気分気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥いちべつを与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳いわけのためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無駄ぶじつな言葉を弄ろうするのではありません。私の本意は後あとをあとご覧になればよく解わかる事と信じます。とにかく私は何とか挨拶あいさつすべきところを黙もくつていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思おもいます。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体ありていに言えば、あの時私はちよつとあなたに会いたかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたのです。あなたは返電を掛かけて、今東京へは出られないと断つて来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺ながめていました。あなたも電報だけでは気が済まなかつたとみえて、また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出京しゅつぎょうできない事情がよく解わかりました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそつち退のけにして、何でああなたが宅うちを空あけられるのですか。そのお父さんの生死しょうしを忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は實際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京にいる頃ころには、難症なんしょうだからよく注意しな

くつてはいけないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳髓^{のうずい}よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我^がを認めています。あなたに許してもらわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執^とりかけましたが、一行も書かずに已^やめました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです。

「私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を擱いても、何にもなりませんでした。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、ほとんど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれをできるだけ切り詰めた生

活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなつたのではありません。むしろ鋭敏^{えいびん}過ぎて刺戟^{しげき}に堪えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦^{いったん}約束した以上、それを果たさないのは、大変厭^{いや}な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といても差支^{さしつか}えないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命^{いのち}と共に葬^{ほうむ}った方が好^いいと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私

の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目まじめだから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じつと見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫つかみなさい。私の暗いというのは、固もとより倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違だいぶんったところがあるかも知れません。しかしどう間違つても、私自身のものです。間に合せて借りた損料そんりようぎ着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには

幾分か参考になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解わかつているでしょう。私はあなたの意見を輕蔑けいべつまでしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去をもつには余りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足りなような顔をちよいちよい私に見せた。その極きよくあなたは私の過去を繪卷物のように、あなたの前に展開してくれと逼せまつた。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮ぶえんりよに私の腹の中から、或る生きたものを捕つかまえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜すすろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭いや

であつた。それで他日^{たじつ}を約して、あなたの要求を斥^{しりぞ}けてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴^あびせかけようとしているのです。私の鼓動^{こどう}が停^{とま}つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

三

「私が両親^なを亡くしたのは、まだ私の廿歳^{はたち}にならない時分でした。いつか妻^{さい}があなたに話していたようにも記憶しています、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、ほとんど同時といつていくくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸^{ちよう}窒^チ扶^フ斯^スでした。それが傍^{そば}にいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅には相
 当の財産があつたので、むしろ鷹揚おうように育てられました。私は自
 分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少
 なくとも父か母かどっちか、片方で好いから生きていてくれた
 なら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたらう
 にと思います。

私は二人の後に茫然あとぼうぜんとして取り残されました。私には知識も
 なく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、
 母は傍はたにいる事ができませんでした。母の死ぬ時、母には父の
 死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覚さとつて
 いたか、または傍はたのものもののいうごとく、実際父は回復期に向い
 つあるものと信じていたか、それは分りません。母はただ叔父おじ
 に万事を頼んでいました。そこに居合いあせた私を指さすようにし

て、「この子をどうぞ何分^{なにぶん}」といいました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになっていましたので、母はそれもついでにいうつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後^{あと}を引き取って、「よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得^うる体質の女なんでしょうか、叔父は「確^{しつ}かりしたものだ」といって、私に向って母の事を褒^ほめていました。しかしこれがはたして母の遺言であつたのかどうか、今考えると分らないのです。母は無論父の雇^{かか}つた病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだいくらでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言

葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向記憶となつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風に物を解きほどこいてみたり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わつていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえつて役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向つて、積極的に大きな力を添えてくれるのは慥かですから覚えていて下さい。

話が本筋^{ほんすじ}をはずれると、分り悪^{にく}くなりますからまたあとへ引き返しましょう。それでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他^{ほか}の人と比べたら、あるいは多少落ち付いていやしないかと思つてゐるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響^{ひびき}ももう途絶^{とだ}えました。雨戸の外にはいつの間にか憐^{あわ}れな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微^{かす}かに鳴いてゐます。何も知らない妻^{さい}は次の室^{へや}で無邪気にすやすや寝入^{ねい}つてゐます。私が筆^とを執ると、一字一劃^{かく}ができあがりつつペンの先で鳴つてゐます。私はむしろ落ち付いた気分で紙に向つてゐるのです。不馴^{ふな}れのためにペンが横^そへ外れるかも知れませんが、頭^{のうらん}が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思ひます。

「とにかくたつた一人取り残された私は、母のいい付け通り、この叔父おじを頼るより外ほかに途みちはなかったのです。叔父はまた一切いっさいを引き受けて凡てすべての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺伐さつぱつで粗野でした。私の知つたものに、夜中よる職人と喧嘩けんかをして、相手の頭へ下駄げで傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句あげくの事なので、夢中に擲なり合ないをしてあいだいる間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形ひしがたの白いきれの上に書いてあつたのです。それで事が面

倒になつて、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達が色々と骨を折つて、ついに表沙汰にせず^{おもてざた}に済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育つたあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も實際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴^{しつぽく}な点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰^{もら}つていた金は、あなたが今、お父さんから送つてもらかう学資に比べると遥^{はる}かに少ないものでした。（無論物価も違いましうが）。それでいて私は少しの不^{あや}足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨^{うらや}ましがる憐^{あや}れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨^{うらや}ましがる方だったでしょう。というのは、私は月々極^{きま}つた送金の外

に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、および臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費する事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父おじを信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもつて、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましょう、政党にも縁故があつたように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父とはまるで違つた方へ向いて発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守つて行く篤実とくじつ一方の男でした。楽しみには、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画しやがこつとう骨董といった風ふうのものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎いなかにありまし

たけれども、二里ばかり隔たつた市、——その市には叔父が住んでいたので、——その市から時々道具屋が懸物だの、香炉だのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父は一口にいうと、まあマン・オフ・ミーンズとでも評したら好いのでしよう。比較的上品な嗜好をもつた田舎紳士だったので。だから気性からいうと、闊達な叔父とはよほどの懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かったです。父はよく叔父を評して、自分よりも遙かに働きのある頼もしい人のようにいつていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだともいつていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむしろ私の心得になるつもりで、それをいつたらしく思われます。「お前もよく覚えているが好い」と

父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなつて、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかつたのです。私の存在に必要な人間になつていたのです。

五

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰つた時、両親の死に断えた私の住居すまいには、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代つて住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たつ

た一人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外ほかに仕方がなかったのです。

叔父はその頃市ころにある色々な会社に関係していたようです。

業務の都合からいえば、今までの居宅きやたくに寝起きねおする方が、二里り

も隔へだたった私の家に移るより遙かに便利だといって笑いました。

これは私の父母が亡くなった後あと、どう邸やしきを始末して、私が東京

へ出るかという相談の時、叔父の口を洩もれた言葉であります。

私の家は旧い歴史ふるをもっているので、少しはその界限かいわいで人に知

られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、

田舎では由緒ゆいしよのある家を、相続人があるのに壊こわしたり売ったり

するのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思ひ

ませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家うち

はそのままにして置かなければならず、はなはだ所置しよちに苦しん

なのです。

叔父^{おじ}は仕方なしに私の空家^{あきや}へはいる事を承諾してくれました。

しかし市^しの方にある住居^{すまい}もそのままにしておいて、両方の間を往^いったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。私に固^{一もと}より異議のありようはありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好^いいくらいに考えていたのです。

子供らしい私は、故郷^{ふるさと}を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人^{たびと}の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがつて出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後^{あと}、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風ふうに両方の間を往ゆき来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家いえの内に集まっていました。学校へ出る子供などは平生へいぜいおそらく市の方にいたのでしょうが、これも休暇のために田舎いなかへ遊び半分かといった格で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえって賑にぎやかで陽気になった家の様子を見て嬉うれしがりました。叔父はもと私の部屋になつていた一間ひとまを占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少なくないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父はお前の宅うちだからといって、聞きませんでした。

私は折々亡くなつた父や母の事を思い出す外ほかに、何の不愉快

もなく、その一夏^{ひとなつ}を叔父の家族と共に過^{すご}して、また東京へ帰つたのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃^{そろ}えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然^{はつきり}断りました。三度目にはこつちからとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単簡^{たんかん}でした。早く嫁^{よめ}を貰^{もら}つてここの家へ帰つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇^{やすみ}になつて帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰^{もら}う、両方とも理屈としては一通り^{ひととお}聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解^{わか}ります。私も絶対にそれを嫌つては

いなかっただけでしょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡とおめがねで物を見るように、遙はるか先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。

六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲ぐるりを取り捲まいている青年の顔を見ると、世帯染しよたいいじみたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独ことごとらしく思われたのです。こういう気楽な人の中うちにも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きま

せんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、あたり四辺にきがね気兼をして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしょう。後から考えると、私自身がすでにその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李をこうり絡からげて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のちちははいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変らない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂いにおを嗅かぎました。その匂いは私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違いなかったのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂いの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔

父のいう所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧め^{すす}られた時には、何らの目的物がなかったのに、今度はちゃんと肝心^{かんじん}の当人を捕^{つか}まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹^{いとこ}に当る女でした。その女を貰^{もら}つてくれれば、お互いのために便宜である、父も存生中^{ぞんしょうちゅう}そんな話を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風^{ふう}な話をしたというのもあり得^うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覚^{さと}つていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解^{わか}りました。私は迂闊^{うかつ}なのでしょいか。あるいはそうなのかも知れませんが、おそらく

その従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつてい
しょう。私は小供のうちから市にいる叔父の家へ始終遊びに行
きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そ
うしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも
ご承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私は
この公認された事実を勝手に布衍しているかも知れないが、始
終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺激の
起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香をか
ぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限ることく、酒を味わうの
は、酒を飲み始めた刹那にあるごとく、恋の衝動にもこういう
際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないので
す。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親
しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。

私はどう考え直しても、この従妹いとこを妻にする気にはなれません
でした。

叔父おじはもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばして
もいいといいました。けれども善ことわざは急げという諺ことわざもあるから、
できるなら今のうちに祝言しゅうげんの盃さかずきだけは済ませておきたいともい
いました。当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事ことで
す。私はまた断りました。叔父は厭いやな顔をしました。従妹は泣
きました。私に添われないから悲しいのではありません。結婚
の申し込みを拒絶されたのが、女として辛つらかったからです。私
が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、
私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付
 でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃
 げました。私には故郷ふるさとがそれほど懐かしかったからです。あな
 たにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、
 土地の匂いにおも格別です、父や母の記憶も濃こまやかに漂ただよっています。
 一年のうちで、七、八の二月ふたつきをその中に包くるまれて、穴に入つた
 蛇へびのように凝じつとしているのは、私に取つて何よりも温かい好い
 心持だったのです。

單純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必
 要がないと思つていました。厭なものは断る、断つてさえしま
 えば後あとには何も残らない、私はこう信じていたのです。だから
 叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにもかかわらず、私はむ

しろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に屈托くつたくした覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰つて見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懷ふところに抱だこうとしません。それでも鷹揚おうように育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにいきました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母おばも妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へはいるつもりだといって、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分しょうぶんとして考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変つたのだろう。いやどうして向うがこう変つたのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍にぶい私の眼を洗つて、

急に世の中が判然^{はつきり}見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世にいらなくなつた後^{あと}でも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていたのです。もつともその頃^{ころ}でも私は決して理に暗い質^{たち}ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信^{まぎん}の塊^{かたまり}りも、強い力で私の血の中に潜^{ひそ}んでいたのです。今でも潜^{ひそ}んでいるでしょう。

私はたつた一人山へ行つて、父母の墓の前に跪^{ひざまず}きました。半^{なかば}は哀悼^{あいとう}の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分で、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌^{たなごころ}を翻すように変わりました。もつともこれは私に

取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはつと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七といえ、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも氣の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんです。う。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物

のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。

八

「私は今まで叔父任^{まか}せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母^{ちちはは}に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体^{からだ}だと自称するごとく、毎晩同じ所に寝泊^{ねとま}りはしていませんでした。二日家^{うち}へ帰ると三日は市^しの方で暮らすといった風^{ふう}に、両方の間^{ゆきぎ}を往来して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉^{くちくせ}を口癖^{くちくせ}のように使いました。何の疑いも起らない時は、私

も実際に忙しいのだらうと思つていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだらうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛かる話をしようという目的ができた眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾をもつてゐるという噂を聞きました。

私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きてゐるうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についておほの噂を語つて聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に

盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。

私はとうとう叔父おじと談判を開きました。談判というのは少しふおんとう不穩当かも知れませんが、話の成行きなりゆからいうと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしています。私はまた始めから猜疑さいぎの眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつくはずはなかったのです。

遺憾いかんながら私は今その談判の顛末てんまつを詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿りたどつきたがつているのを、漸やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会って静かに話す機会を永久に失った

私は、筆を執^とる術^{すべ}に慣れないばかりでなく、貴^{たつと}い時間^{おし}を惜むという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないといった事を。あの時あなたは私に昂奮^{こうふん}していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金^{ひとくち}と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪^{ぞうお}と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答え

は、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかったかも知れません、陳腐ちんぷだったかも知れません。けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮ひやしていません。私は冷やかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きていると信じています。血の力で体が動くたいからです。言葉が空氣に波動を伝えるばかりでなく、もつと強い物にもつと強く働き掛ける事ができるからです。

九

「一口ひとくちでいうと、叔父は私の財産を胡魔化わたくししたのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易たやすく行われたのです。すべてを叔

父^ま任せにして平気でいた私は、世間的にいえば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純^{たつと}なる尊い男とでもいえましょうか。私はその時の己^{おの}れを顧みて、なぜもつと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分が口^く惜しくつて堪^{たま}りません。しかしまたどうかして、もう一度あいう生れたままの姿に立ち帰つて生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵^{ちり}に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父^{おじ}は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずつ

と下卑^{げび}た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹^{いとこ}を愛していないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思います。胡魔化^{ごまか}されるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載^のせられ方からいえば、従妹を貰^{もら}わない方が、向うの思い通りにならないという点から見て、少しは私の我^がが通つた事になるのですから。しかしそれはほとんど問題とするに足りない些細^{ささい}な事柄です。ことに関係のないあなたにいわせたら、さぞ馬鹿気^{ばかげ}た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚^{しんせき}のものがはいりました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺^{あざむ}いたと覺^{さと}ると共に、他のものも必^{ほか}ず自分を欺^{あざむ}くに違いないと思い詰めま

した。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理^{ロジック}でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切^{いっさい}のものを纏^{まと}めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期^{はる}より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤^{いざどお}りました。また迷いました。訴訟^{らくちやく}にすると落着^{らくちやく}までに長い時間のかかる事も恐れました。私は修業中からだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市^しにおける中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形^{かたち}に変えようとなりました。旧友は止^よした方が得だといって忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永^{こきよう}く故郷を離れる決心をその

時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓ったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事ありません。もう永久に見る機会も来ないでしよう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もつともそれは私が東京へ着いてからよほど経^たった後の事^{のち}です。田舎^{いなか}で畠^{はたち}地などを売ろうとしたつて容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐^{ふところ}にして家を出た若干の公債と、後^{あと}からこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固^{もと}より非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的

に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実をいうと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。おと

十

「金に不自由のない私は、わたくし騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんばあの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅をうち留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。おぼつかある日

私はまあ宅^{うち}だけでも探してみようかというそぞろ心^{ごころ}から、散歩が
 てらに本郷台^{ほんごうだい}を西へ下りて小石川^{こいしかわ}の坂を真直^{まっすぐ}に伝通院^{でんずういん}の方へ上
 がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がま
 るで違つてしまいましたが、その頃^{ころ}は左手が砲兵工廠^{ほうへいこうしよう}の土塀^{どべい}で、
 右は原とも丘ともつかない空地^{くうち}に草が一面に生えていたもので
 す。私はその草の中に立つて、何心^{なにごころ}なく向うの崖^{がけ}を眺^{なが}めました。
 今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西
 側の趣^{おもむき}が違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂つてい
 るだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適^{うち}当^{うち}な宅^{うち}
 はないだろうかと思ひました。それで直^すぐ草原^{くさはら}を横切つて、細
 い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好^いい町になり切
 れないで、がたぴししているあの辺^{へん}の家並^{いえなみ}は、その時分の事で
 すからずいぶん汚^うらしいものでした。私は露次^{ろじ}を抜けたり、

横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。しまいに駄菓子屋だがしやの上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家かしやはないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」といつて、少時首しやうくをかしげていましたが、「かし家はちよいと……」と全く思い当たらない風ふうでした。私は望のぞみのないものと諦あきらめて帰り掛けました。すると上さんがまた、「素人下宿しろうとげしゆくじゃいけませんか」と聞くのです。私はちよつと気が変わりました。静かな素人屋しろうとやに一人で下宿しているのは、かえつて家うちを持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷いちがやの士官学校しかん

の傍^{そば}とかに住んでいたのだが、厩^{うまや}などがあつて、邸^{やしき}が広過ぎるの
 で、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人^{ぶにん}で
 淋^{さむ}しくつて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼ま
 れていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人^{びぼうじん}と
 一人娘と下女^{げじよ}より外^{ほか}にいないのだという事を確かめました。私
 は閑静で至極^{しごく}好かろうと心の中^{うち}に思いました。けれどもそんな
 家族のうちに、私のようなものが、突然行つたところで、素性^{すじよう}
 の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしま
 いかという掛念^{けねん}もありました。私は止^よそうかとも考えました。
 しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装^{なり}はしていませんで
 した。それから大学の制帽を被^{かぶ}つていました。あなたは笑うで
 しょう、大学の制帽がどうしたんだといつて。けれどもその頃
 の大学生は今と違つて、大分^{だいぶん}世間に信用のあつたものです。私

はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出したくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わった通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人びぼうじんに会って来意らいいを告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握ったのでしよう、いつでも引越して来て差支さしつかえないという挨拶あいさつを即坐そくざに与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然はつきりした人でした。私は軍人の妻君さいくんというものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性きしょうでどこが淋さむしいのだろうと疑いもしました。

「私は早速さつそくその家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中うちじゅうで一番好い室へやでした。本郷辺ほんごうへんに高等下宿といった風の家ふうがぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間まの様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床とこの横に違い棚ちがひだながあつて、縁えんと反対の側には一間いっけんの押入れおしいが付いていました。窓は一つもなかったのですが、その代り南向きみなみむきの縁に明るい日がよく差しました。

私は移つた日に、その室の床とこに活いけられた花と、その横に立て懸かけられた琴ことを見ました。どっちも私の氣に入りませんでした。

私は詩や書や煎茶せんちやを嗜たしなむ父の傍そばで育つたので、唐からめいた趣味を小供こどものうちからもつていました。そのためでもあります。か、こういう艶なまめかしい装飾をいつの間にか軽蔑けいべつする癖が付いていたのです。

私の父が存生ぞんしょう中にあつめた道具類は、例の叔父おじのために滅茶滅茶にされてしまったのですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中うちで面白うちそうなものを四、五幅ふく裸にして行李こうりの底へ入れて来ました。私は移るや否いなや、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴と活花いけばなを見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後あとから聞いて始めてこの花が私に対するご馳走ちそうに活けられたのだという事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。もつとも琴は前からそこ

にあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままだに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠^{かす}めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪氣^{じやき}が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣^{ひとな}れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢^{じよう}さんに会つた時、へどもどした挨拶^{あいさつ}をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人^{びぼうじん}の風采^{ふうさい}や態度から推^おして、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人^{さいくん}の妻君^{さいくん}だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測

が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかった異性の匂いにおが新しく入って来ました。私はそれから床の正面に活いけてある花が厭いやでなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋しおれる頃ころになると活かけ更かえられるのです。琴も度々鍵たびたびの手に折れ曲がった筋違すじかいの室へやに運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖ほおづえを突きながら、その琴の音ねを聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解わからないのです。けれども余り込み入った手を弾ひかないところを見ると、上手なのじゃなかろうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ういました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨うまい方ではなかったのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。もつとも活方いけかたはいつ見ても同じ事でした。それから花瓶かへいもついで変つた例ためしがありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりもつと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声いっこうを聞かせないのです。唄うたわないのではありませんが、まるで内所話ないしょばなしでもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱しかられると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花ながを眺めては、まずそんな琴ねの音に耳を傾けました。

十二

「私の気分は国を立つ時すでに厭世えんせい的てきになつていました。他ひとは

頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父おじだの叔母おばだの、その他の親戚しんせきだのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈鬱ちんうつでした。鉛を呑のんだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがつてしまったのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因げんいんになつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだといえばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懐中ふとしろに余裕ができて、好んでそ

んな面倒な真似はしなかったでしょう。

私は小石川へ引き移ってから、自分この緊張した気分に寛ぎを与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥ずかしいほど、きよときよと周囲を見廻していました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐っていました。時々は彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さえあつたのです。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢さんを通じて好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なそ

の人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外ほかに仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましよう。私は金に対して人類を疑うたぐつたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかつたのです。だから他ひとから見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人びぼうじんの事を常に奥さんといっていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんといひます。奥さんは私を静かな人、おとな大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒ほめてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子について、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかつたの

か、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚おうような方かただといつて、さも尊敬したらしい口の利き方きをした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目まじめに説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅うちへ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷ざしきを貸す料簡りようけんで、近所のものに周旋を頼んでいたらしいのです。俸給ゆたが豊かゆたでなくつて、やむをえず素人屋しろうとやに下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいつていたのでしょう。奥さんは自分の胸えがに描いたその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だと

いつて褒めるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。

十三

奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこきよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ちゃんと落ち付いているよ
うな気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻

だ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風ふうに取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、実際私を鷹揚おうようだと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかつたようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化ごまかされていたのかも解わかりません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談じょうたんをいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室へやへ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買つて来て、二人をこつちへ招いたりする

晩もありました。私は急に交際の区域が殖^ふえたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰^{つぶ}される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔^{いっこう}にならなかったのです。奥さんはもとより閑人^{ひまじん}でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといつしよに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室^{へや}の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖^{ふすま}の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちよつと留^とまります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物

を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍はたで見たら
さぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際をいうと、
それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁ページの上に
眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているく
らいなものでした。待つていて来ないと、仕方がないから私の
方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こつ
ちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋へやは茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその
茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋へやにいる事もあり
ました。つまりこの二つの部屋は仕切しきりがあつても、ないと同じ
事で、親子二人が往いつたり来たりして、どっち付かずに占領し
ていたのです。私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と
答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにいても滅多めった

に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいったついでに、そこに坐すわつて話し込むような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒おかされて来るのです。そうして若い女とただ差向さむかいで坐っているのが不安なのだとばかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平氣でした。これが琴を浚さらうのに声さえ碌ろくに出せなかつたあ二の女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解わかっていました。よく解るよう

に振舞つて見せる痕迹こんせきさえ明らかでした。

十四

「私はお嬢さんの立つたあとで、ほつと一息ひといきするのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持になるのです。私は女らしかったのかも知れませんが、今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃ころの私たちは大抵そんなものだったのです。」

奥さんは滅多めったに外出した事がありませんでした。たまに宅うちを留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの

様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付けてもらいたかったのです。頭の働きからいえば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一歩踏み込んだ疑いを挟まずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。

必竟女だからああなのだ、女というものはどうせ愚^ぐなものだ。
私の考えは行き詰^つまればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊^{みくび}っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊^なる事ができなかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高^{けだか}い気分がすぐ自分に乗り移^りつて来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端^{りょうはし}があつて、その高い端^{はし}には神聖な感じが働

いて、低い端には性欲せいよくが動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕つかまえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いにおを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱いだくと共に、子に対して恋愛の度を増まして行つたのですから、三人の關係は、下宿した始めよりは段々複雑になつて来ました。もつともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかつたのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだらうと考え直して来たのです。その上、それが互たがい違ちがいに奥さんの心を支配するのでなくつて、いつでも

両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがつっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さきざなかつた私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりました。

「私は奥さんの態度を色々綜合そうごうして見て、私がこの家うちで充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他ひとを疑うたぐり始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覺に富んでいるのだろうと思ひました。同時に、女が男のために、欺だまされるのもここにあるのではなからうかと思ひました。奥さんをそう觀察する私わたしが、お嬢さんに対して同じような直覺を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他ひとを信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思つたのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もいわなかつたのです。私はそれを

念頭に浮べてさえずでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力め^{つと}ました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰つても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い^い事をしたと思いました。私は嬉^{うれ}しかったです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。それから私を自分の親戚^{みより}に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑^{さいぎしん}心がまた起つて来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損

ではなかったのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったく
らいの強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を
加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑ちやうしやうしました。

馬鹿だなどいって、自分を罵ののした事もあります。しかしそれだ

けの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだ
のです。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家で

はなからうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私
の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思う

と、私は急に苦しくって堪たまらなくなるのです。不愉快なのでは

ありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。

それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったの
です。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事が

できなくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。

十六

「私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸^しみ渡^らないうちに烟^{けむ}のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想^{めいそう}に耽^{ふけ}つてでもないかのように、他^たの友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好^いい仮面を人が貸してくれたのを、かえつて仕^しあ^わせとして喜びました。それでも時々は気が済まな

かつたのでしよう、発作的に焦燥はしやぎ廻まわつて彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入ひとでいりの少ない家うちでした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんでしたが、極めて小さきな声で、いるのだかいらないのだか分らないような話をして帰つてしまふのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅うちの人ひとに気兼きがねをするほどな男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人あるじのようなもので、肝心かんじんのお嬢さんがかえつて食客いそうろうの位地いぢにいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにもどうでもよくない事が一つ

あつたのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、^{へや}突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮^{こうふん}を与えるのです。私は坐^{すわ}つていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのはです。坐^{すわ}つていてそんな事の知れようはありますがありません。そうかといつて、起^たつて行^{しやうじ}つて障子を開けて見る訳にはなおいきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二

人に見せながら、物足りるまで追窮する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょう。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切うらぎりしている物欲しそうな顔付かおつきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑ちやうしょうの意味でなくつて、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即座に解釈の余地を見出し得ないほど落付おちつきを失つてしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなかうかと、何遍なんべんも心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体からだでした。たとい学校を途中で已めやようが、まだどこへ行つてどう暮らそうが、あるいはどこの何者と結婚しようが、誰だれとも相談する必要のない位地に立っていました。私

は思い切つて奥さんにお嬢さんもらを貰い受ける話をして見ようか
 という決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれ
 どもそのたびごとに私は躊躇ちゆうちよして、口へはとうとう出さずにし
 まつたのです。断られるのが恐ろしいからではありません。も
 し断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、
 その代り今までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中
 を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出
 せば出せたのです。しかし私は誘おびき寄せられるのが厭いやでした。
 他ひとの手に乗るのは何よりも業腹ごうはらでした。叔父おじに欺だまされた私は、
 これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心した
 のです。

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろとい
 いました。私は實際田舎で織った木綿ものしかもつていなかっ
 たのです。その頃の学生は絹の入った着物を肌に着けませんで
 した。私の友達に横浜の商人が何かで、宅はなかなか派出所に暮
 しているものがありました。そこへある時羽二重の胴着が配
 達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。
 その男は恥ずかしがつて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李
 の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つて
 たかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がた
 かりました。友達はどうも幸いとも思つたのでしよう、評
 判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大
 きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いつしよに歩いて

いた私は、橋の上に立つて笑いながら友達の所作しよさを眺ながめていましたが、私の胸のどこにも勿体もったいないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大分大人だいぶんになっていました。けれどもまだ自分で余所行よそゆきの着物を拵ひげえるといふほどの分別ぶんべつは出なかつたのです。私は卒業して髯ひげを生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要いるが着物は要らないといいました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引うちきもあります。当然眼を通すべきはずでありながら、頁ページさえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだ

という事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの氣に入るような帶か反物たんのものを買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいつしよに來いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違つた空氣の中に育てられた私どもは、學生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻まわる習慣をもつていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇ちゆうちゆうしましたが、思い切つて出掛けました。

お嬢さんは大層着飾おしろいっていました。地体じたいが色の白いくせに、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちます。往来の人がじろじろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なもので

した。

三人は日本橋へ行つて買いたいのを買いました。買う間に

も色々氣が變るので、思つたより暇ひまがかかりました。奥さんは

わざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするのです。時々

反物たんものをお嬢さんの肩から胸へたて豎あに宛てておいて、私に二、三歩

遠退とおのいて見てくれろというのです。私はそのたびごとに、それ

は駄目だめだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を

聞きました。

こんな事で時間が掛かつて帰りは夕飯ゆうめしの時刻になりました。奥

さんは私に対するお札ちそうに何かご馳走きはらだなするといつて、木原店とい

う寄席よせのある狭い横丁よこちようへ私を連れ込みました。横丁も狭いが、

飯を食うわせる家も狭いものでした。この辺へんの地理を一向心得いっこうな

い私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入いって家へ帰うちりました。その翌あくるひ日は日曜でしたから、私は終日室へやの中に閉うちじ籠こもっていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つぱらそうそう級友の一人から調戯からかわれました。いつ妻さいを迎えたのかといつてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君さいくんは非常に美人だといつて賞ほめるのです。私は三人連づれで日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見られたものとみえます。

十八

「私は宅うちへ帰つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうといつて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風ふうにして、女から

気を引いて見られるのかと思いました。奥さんの眼は充分私に
 そう思わせるだけの意味をもっていたのです。私はその時自分
 の考えている通りを直截ちよくせつに打ち明けてしまえば好かつたかも知
 れません。しかし私にはもう狐疑こぎという薩張さつぱりしない塊かたまりがこ
 びり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留とま
 りました。そうして話の角度を故意に少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分というものを問題の中から引き抜いてしま
 いました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つ
 たのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事
 を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくら
 いで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しまし
 た。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色だいろに大分
 重きを置いているらしく見えました。極きめようと思えばいつで

も極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外ほかに子供がないのも、容易に手離したがいけない原因げんいんになっていました。嫁にやるか、贅むこを取るか、それにさえ迷っているのではなからうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いっしたと同様の結果に陥おちいつてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事ができませんでした。私は好いい加減なところで話を切り上げて、自分の室へやへ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいつて笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿うしろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。

お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前すわにして坐っていました。その戸棚の一尺しゃくばかり開あいている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間の端はじに、一昨日おととい買った反物たんのものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解わからないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然はつきりした時、私はなるべく緩ゆつくらな方がいいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人

男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来^{きた}しています。もしその男が私の生活の行路^{こうろ}を横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かず^うにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅^{うち}へ引張^{ひっぱ}つて来たのです。無論奥さんの許諾^{きょだく}も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止^よせといいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善^いいと思うところを強^しいて断行してしまいました。

十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供こどもの時からなかよしの仲好でした。小供の時からといえは断らないでも解とつているでしよう、二人には同郷の縁故があつたのです。Kは真宗しんしゅうの坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者いしやの所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派ほんがんじはの勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他ほかのものに比べると、物質的に割が好かつたようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃としごろになつたとすると、檀家だんかのものが相談して、どこか適當な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんふところの懐から出る

ではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の家へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室へやによく二人も三人も机を並べて寝起ねおきしたものです。Kと私も二人で同じ間まにいました。山で生捕いけどられた動

物が、檻おりの中で抱き合いながら、外を睨にらめるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏おそれました。それでいて六畳の間まの中では、天下を睥睨へいげいするような事をいつていたのです。

しかし我々は真面目まじめでした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かったのです。寺に生れた彼は、常に精進しょうじんという言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えただのです。私は心のうちで常にKを畏敬いけいしていました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に属する空氣の影響なのか、解わかりません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙はるかに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられま

す。元來Kの養家^{ようか}では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺^{あざむ}くと同じ事ではないかと詰^なりました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとはいえませんが、しかし年の若い私たちには、この漠然^{ぼくぜん}とした言葉が尊^{たつ}とく響いたのです。よし解らないにしても氣高^{けだか}い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こうとする意氣組^{いきぐみ}に卑^{いや}しいところの見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKにとつてどのくらい有力であつたか、それは私も知りません。一図^{いちず}な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の

思い通りを貰いたに違いなかうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当しとうになるくらいな語気で私は賛成したのです。

二十

「Kと私わたくしは同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸

とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平氣でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込こまごめのある寺の一間ひとまを借りて勉強するのだといっていました。私が帰つて来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音おおがんのんの傍そばの汚い寺の中に閉じ籠こもっていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室へやでしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでゐるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸てくびに珠数じゆずを懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似まねをして見せました。彼はこうして日に何遍なんべんも珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解わかりません。円い輪になつてゐるものを一粒ずつ数えてゆ

けば、どこまで数えていつても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰つまぐる手を留めたでしょう。詰つまらない事です、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経きようの名を度々たびたび彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教キリストきようについては、問われた事も答えられた例ためしもなかったのですから、ちよつと驚きました。私はその理由わけを訊たずねずにはいられませんでした。Kは理由はないといいました。これほど人の有難ありがたがる書物なら読んでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。

帰つても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家で
 もまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受
 けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世
 間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知
 なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていませ
 ん。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているのです、校内
 の事は細大ともに世の中に知れ渡っているはずだと思ひ過ぎる
 癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていた
 のでしょう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は
 私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったと
 Kに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと
 決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応

じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をするのだというので
 す。彼はまた踏み留とどまつて勉強するつもりらしかったのです。
 私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮
 らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾はらんに富ん
 だものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不
 平と幽鬱ゆううつと孤独の淋さびしさを一つ胸に抱いだいて、九月に入いつてま
 たKに逢あいました。すると彼の運命もまた私と同様に變調を示
 していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出し
 て、こつちから自分の詐いつわりを白状してしまつたのです。彼は最
 初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お
 前の好きなものをやるより外ほかに途みちはあるまいと、向うにいわせ
 るつもりもあつたのでしょうか。とにかく大学へ入つてまでも
 養父母を欺あざむき通す氣はなかつたらしいのです。また欺こうとし

でも、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。

二十一

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事はできないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどう

かしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か^{かんが}考えがあるのかと尋ねました。

^{やがつころ}

Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外^{ぞんがい}世の中が寛^{くつ}ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど^{ふつてい}払底でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に^{そむ}背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといつて手を^{こめぬ}拱いでいる訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳^はね付けました。彼の性格からいって、自活の方が友達の保護の下に立^{もと}つより遥^{はるか}に快よく思われたのでしよう。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ男でないような事をい

いました。私は私の責任を完^{まつと}うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜^おしむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛^{つら}かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩^{ゆる}めずに、新しい荷を背負^{しよ}つて猛進したのです。私は彼の健康を気遣^{きづか}いました。しかし剛気^{ごうき}な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡^{がら}がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末^{てんまつ}を詳しく聞かずにしまいました。解決のますます困難になってゆく事だけは承知していました。

人が仲に入つて調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だといって、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないといひましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてもKの味方をする氣になりました。

最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出してもらつた学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の

方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉でいえば、まあ勘当かんどうなのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔へだたりができずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶そうりよでした。けれども義理堅い点において、むしろ武士さむらいに似たところがありはしないかと疑われます。

二十二

「Kの事件が一段落あとついた後で、私は彼の姉わたくしの夫から長い封書

を受け取りました。Kの養子に行つた先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰もらいたという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついだ兄よりも、他家たけへ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、この姉とKとの間には大分だいぶ年齒としの差があつたのです。それでKの小供の時分には、継母まははよりもこの姉の方が、かえつて本当の母らしく見えたのでしよう。私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三

度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中うちに、万一の場合には私がどうしてもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固もとより私の一存いちぞんでした。Kの行先ゆくさきを心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を輕蔑けいべつしたとより外ほかに取りよよううのない彼の実家や養家ようかに対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃なかごろになるまで、約一年半の間、彼は独力おので己れを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に

影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る
出ないの蒼蠅うるさい問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的センチメンタル
になって来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を
一人で背負しよつて立っているような事をいいます。そうしてそれ
を打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわ
る光明こうみょうが、次第に彼の眼を遠退とおのいて行くようにも思つて、いら
らするのです。学問のぼをやり始めた時には、誰しも偉大な抱負
をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過
ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのろのに
気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になっています
から、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮あせり方はまた普通に
比べると遙はるかに甚はなはだしかったです。私はついに彼の氣分を落ち
付けるのが専一せんいちだと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せよといいました。そうして当分身体からだを楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情ごうじやうなKの事ですから、容易に私のいう事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際いい出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだということです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興すいきやうです。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかつていくくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極しじく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだったとついに

は明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路をみち辿たどつて行きたいと発議ほつぎしました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪ひざまずく事をあえてしたのです。そうして漸やっとの事で彼を私の家に連れて来ました。

二十三

「私の座敷には控えの間まというような四畳が付属していました。玄関を上がつて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極しごく不

便な室^{へや}でした。私はここへKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考^いえだつたのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好^いいといつて、自分でそつちのほうを択^{えら}んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に對して始めは不賛成だつたのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止^よした方が好^いいというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいというと、世話は焼けないでも、氣心の知れない人は厭^{いや}だと答えるのです。それでは今厄介^{やっかい}になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰^なると、私の氣心は初めからよく分つてゐると弁解して已^やまないのです。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更^かえます。そんな人を連れて

来るのは、私のために悪いから止せよといひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だつて強しいてKといつしよに在る必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇ちゆうちよするだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅うちへ置いて、二人前ふたりまえの食料を彼の知らない間まにそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける氣はありませんでした。

私はただKの健康について云々うんぬんしました。一人で置くとますます人間が偏屈へんくつになるばかりだからといひました。それに付け足して、Kが養家ようかと折合おりあいの悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺おぼれかかつた人を抱いて、

自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒を見てやってくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。すべてそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむちりした様子をしているにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないといっただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿つ

ぼい臭いにおのする汚い室へやでした。食物くいものも室相応そうおうに粗末そまつでした。私
 の家へ引き移った彼は、幽谷ゆうこくから喬木きやうぼくに移った趣があつたくら
 いです。それをさほどに思う気色けしきを見せないのは、一つは彼の
 強情から来ているのですが、一つは彼の主張から出ているので
 す。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢ぜいたく
 をいうのをあたかも不道德のように考えていました。なまじい
 昔の高僧だとか聖徒せいとだとかの伝でんを読んだ彼には、ややともする
 と精神と肉体とを切り離れたがる癖がありました。肉を鞭撻べんたつ
 すれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れま
 せん。

私はなるべく彼に逆さからわれない方針を取りました。私は氷を日向ひなた
 へ出して溶とかす工夫をしたのです。今に融とけて温かい水になれ
 ば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたので

す。

二十四

「私は奥さんからそういう風ふうに取り扱われた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違だいぶんのある事は、長く交際つきあつて来た私によく解わかつていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角かどが取れたごとく、Kの心もここに置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持つて生れた頭たちの質が私よりもずつ

とよかつたのです。後あとでは専門が違いましたから何ともいえませんが、同じ級あいだにいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつたくらいです。けれども私が強しいてKを私の宅うちへ引ひつ張ばつて来た時には、私の方がよく事理を弁わかままいると信じていました。私にいわせると、彼は我慢と忍耐の區別を了解していないように思われたのです。これはとくにあなたのために付け足しておきたいのですから聞いて下さい。肉體なり精神なりすべて我々の能力は、外部の刺戟しげきで、発達もするし、破壊されもするでしょうが、どっちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に險惡な方向へむいて進んで行きながら、自分はもちろん傍はたのものも気が付かずにいる恐れが生じてきます。医者いしやの説明を聞く

と、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食っている、それ以上の堅いものを消化す力がいつの間にかなくなってしまうのだそうです。だから何でも食う稽古をしておくと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思います。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味ではなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像してみればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに氣が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだ、と極めていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が氣にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきつと反抗されるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引合ひきあいに持つて来るに違いないと思いました。た。そうなれば私だつて、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯うけがしてくれるよ
うなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこ
までゆくと容易に後あとへは返りません。なお先へ出ます。そうし
て、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛かります。彼はこう
なると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつ
つ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く
意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも
決して平凡ではありませんでした。彼の気性きしょうをよく知った私は
ついに何ともいう事ができなかったのです。その上私から見

と、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹^かつていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏^{けんか}せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩^{けんか}をする事は恐れてはいませんでしたが、私が孤独の感に堪^たえなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭^{いや}でした。それで私は彼が宅^{うち}へ引き移つてからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五

「私は陰^{かげ}へ廻^{まわ}つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をす

るように頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に祟^{たた}つているのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆^{さび}が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取り付き把^はのない人だといつて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来^きようという、要^いらないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきません。気の毒だから、何とかいつてその場を取り繕^{つくろ}つておかなければ濟まなくなります。もつともそれは春の事ですから、強^しいて火にあたる必要もなかつたのですが、これでは取り付き

把がないといわれるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になって、女二人とKとの連絡をはかるように力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引っ張り出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見て實際彼の軽蔑に悩んでいたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも

いわれるでしょう。私もそれを否^{いな}みはしません。しかし眼だけ高くつて、外^{ほか}が釣り合わないのは手もなく不具^{かたわ}です。私は何を措^おいても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像^{イメジ}で埋^{うず}まっても、彼自身が偉くなつてゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍^{そば}に彼を坐^{すわ}らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空氣に彼を曝^{さら}した上、錆^さび付きかかった彼の血液を新しくしようと試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏^{まと}まつて来出^{きだ}しました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟つてゆくようでした。彼はある日私に向つて、女はそう輕蔑^{けいべつ}すべきものでないというよう

な事をいいました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われれます。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を（なんによ）一様に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもつともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃（ころ）でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口（ひとくち）も打ち明けませんでした。今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠（こも）つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出

したのですから、自分の成功に伴う喜びを感じずにはいられなかったのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。

二十六

「Kと私は同じ科わたくしにおりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室くうしつを通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶あいさつをして自分の部屋へはいるのを例にしていました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖ふすまを開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰つたのかといいます。私は何も答えないで點頭うなずく事もありますし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる

場合もあります。

かんだ

ある日私は神田かんだに用があつて、帰りがいつもよりずっと後おくれました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子こうしをがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥たしかにKの室へやから出たと思ひました。玄関から真直まつすぐに行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取まどりなのですから、どこで誰の声がしたくらは、久しく厄介やっかいになつてゐる私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでゐるうち、——私はその時分からハイカラで手数てかずのかかる編上あみあげを穿はいていたのですが、——私がごこんでその靴紐くつひもを解くいてゐるうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疳違かんちがいかも知

れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐すわっていました。Kは例の通り今帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐ったままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬かたいように聞こえました。どこかで自然を踏み外はずしているような調子として、私の鼓膜こまくに響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女げじよも奥さんといつしよに出たのでした。だから家うちに残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちよつと首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りに

して、宅を空けた例はまだなかつたのですから。私は何か急用うちでもできたのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だといえはそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断ふだんの表情に帰りました。急用ではないが、ちよつと用があつて出たのだと真面目まじめに答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食ばんめしの食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳ぜんを運んで来てくれたのですが、それがいつの

間にか崩れて、飯時めしどきには向うへ呼ばれて行く習慣になつていたのです。Kが新しく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極きめました。その代り私は薄い板で造つた足の畳たたみ込める華奢きゃしゃな食卓を奥さんに寄附きふしました。今ではどこの宅うちでも使つてゐるようですが、その頃ころそんな卓の周圍に並んで飯を食う家族はほとんどなかつたのです。私はわざわざ御茶おちやの水みずの家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に肴屋さかなやが来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いてゐる以上、それをもつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さん

に叱しかられてすぐ已やめました。

二十七

「一週間ばかりして私わたくしはまたKとお嬢さんがいつしよに話している室へやを通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否いなや笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったのでしよう。それをつい黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障子しょうじを開けて茶の間へ入ったようでした。

夕飯ゆうめしの時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨にらめる

ような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院でんづういんの裏手から植物園の通りをぐるりと廻まわつてまた富坂とみざかの下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間あいだに話した事は極めて少なかったのです。性質からいうと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかったのです。しかし私は歩きながら、できるだけ話を彼に仕掛しかけてみました。私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知れたかったです。ところが彼は海のものと山のものとも見分けみわけの付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方かたに多くの注意を払っているように見えました。もつともそれ

は二学年目の試験が目の前に逼せまっている頃ころでしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょう。その上彼はシュエデンボルグがどうだとかこうだとかいって、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済おしました時、二人とももう後あと一年だといって奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一ゆいいつの誇ほこりとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古けいこしている縫針ぬいはりだの琴だの活花いけばなだのを、まるで眼中に置いてないようでした。私は彼の迂闊うかつを笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁はんぱくもしませんでした。その代

りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を輕蔑けいべつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数かずとも思っていないらしかったからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬しつとは、その時にもう充分萌もぎしていたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振くちぶりを見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行っても差支さしかえない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅うちで書物を読んだ方が自分の勝手だというのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のため

だと主張すると、それなら私一人行つたらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見てゐるのが、余り好^いい心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私は馬鹿に違いなのです。果^{はて}しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしょに房州^{ぼうしゅう}へ行く事になりました。

二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも^{わたくし}房州^{ぼうしゅう}は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸した

のです。たしか保田^{ほた}とかいいました。今ではどんなに変つて
るか知りませんが、その頃はひどい漁村^{ころ}でした。第一^{だいち}どこもか
しも腥^{なまぐさ}いのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、
すぐ手だの足だのを擦^すり剥^むくのです。拳^{こぶし}のような大きな石が打
ち寄せる波に揉^もまれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭^{いや}になりました。しかしKは好^いいとも悪いともいい
ません。少なくとも顔付^{かおつき}だけは平気なものでした。そのくせ彼
は海へ入るたんびにどこかに怪我^{けが}をしない事はなかつたのです。
私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦^{とみうら}に行きました。富
浦^{おも}からまた那古^{なこ}に移りました。すべてこの沿岸はその時分から
重^{おも}に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようと手頃^{てごろ}
の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐^{すわ}つて、
遠い海の色や、近い水の底を眺^{なが}めました。岩の上から見下^{みおろ}す水

は、また特別に綺麗きれいなものでした。赤い色だの藍あいの色だの、普通市場しじょうに上のぼらないような色をした小魚こうおが、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐まつて、よく書物をひろげました。Kは何もせず
に黙もくっている方が多かつたのです。私にはそれが考えに耽ふけつて
いるのか、景色に見惚みとれているのか、もしくは好きな想像を描えがい
ているのか、全く解わからなかつたのです。私は時々眼を上げて、K
に何をしているのだと聞きました。Kは何もしてないと一口ひとくち
答えるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐まっている
ものが、Kでなくつて、お嬢さんだつたらさぞ愉快だろうと思
う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時に
はKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐まっている
のではないかしらと忽然こっぜん疑い出すのです。すると落ち付いてそ

こに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。^{あが}そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。^ま纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事ではきないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頸^{えりくび}を後ろからぐいと攫^{つか}みました。こうして海の中へ突き落したらどうするといつてKに聞きました。Kは動きま
せんでした。後ろ向きのまま、ちょうど好^いい、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑^{おさ}えた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分^{だいぶん}よくなつていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になつて来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨^{うらや}ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合^あう気色^{けしき}を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。

しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明らかにしました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲斐があつたのを嬉しく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけると鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅へ連

れて来たのです。

二十九

ころ

「私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。もつともこれはその時に始まつた訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨くゆかなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもつていても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今

のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それがどうかく道学よしゅうの余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶たまには愛とか恋とかいう問題も、口のぼに上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまっただけでした。それも滅多めったには話題にならなかったのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩くずせるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍なんべん齒がゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかない空気を吹き込んでやり

たい気がしました。

あなたがたから見て笑止^{しょうしせんばん}千萬な事もその時の私には實際大困難だったのです。私は旅先でも宅^{うち}にいた時と同じように卑怯^{ひきよう}でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかつたのです。私にいわせると、彼の心臓の周囲は黒い漆^{うるし}で重く塗り固められたのも同然でした。私の注^{そそ}ぎ懸^{ことごと}けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾^{はじ}き返されてしまうのです。

或^ある時はあまりKの様子が強くて高いので、私はかえって安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫^わびました。詫^わびながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭^{いや}な心持になるのです。しかし少^{しばらく}時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち

返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌ようぼうもKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間まが抜けていて、それでどこかに確しつかりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力がくりきになれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先めさきへ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭いやならひとまず東京へ帰つてもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかつたのかも知れません。二人は房州ぼうしゅうの鼻はなを廻まわつて向う側へ出ました。我々は

暑い日に射^いられながら、苦しい思いをして、上総^{かずさ}のそこ一里^{いちり}に騙^{だま}されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いていく意味がまるで解^{わか}らなかつたくらいです。私は冗談^{じょうだん}半分Kにそういういました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入^いって行こうといつて、どこでも構^{かま}わず潮^{しお}へ漬^{つか}りました。その後^{あと}をまた強い日で照り付けられるのですから、身体^{からだ}が倦怠^{だる}くてぐたぐたになりました。

三十

「こんな風^{ふう}にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然^{から}身体^{からだ}の調子^{ひと}が狂^{くる}つて来るものです。もつとも病氣とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂^{たま}が宿替^{やどがえ}をしたような気分になるのです。

わたくしへいぜい
私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事ができたのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしていてもつもと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数もよほど経っていますし、それに私にはそれほど興味の無い事ですから、判然とは覚えていませんが、何でもそこは日蓮の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、

鯛が二尾磯^{びいそ}に打ち上げられていたとかいう言伝^{いいつた}えになつてゐるのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟を傭^{やと}つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図^{いちず}に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものとみえます。彼は鯛よりもかえつて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちようどそこに誕生寺^{たんじょうじ}という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍^{がらん}でした。Kはその寺に行つて住持^{じゅうじ}に会つてみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装^{なり}をしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ば

された結果、菅笠すげがさを買つて被かぶつていました。着物は固もとより双方とも垢あかじみた上に汗あせで臭くさくなつていました。私は坊さんなどに会あうのは止よそうといたしました。Kは強情きやうじやうだから聞きません。厭いやなら私だけ外に待つていろというのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断ことわられるに違ちがひないと思つていました。ところが坊さんというものは案外ていねい丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分だいぶん考えが違つていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける氣も起りませんでした。が、Kはしきりに日蓮そくにちれんの事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮そうにちれんといわれるくらいで、草書そうしょが大変上手であつたと坊さんがいった時、字の拙まずいKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意

味の日蓮が知りたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内けいだいを出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々うんぬんし出しました。私は暑くて草臥くたびれて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶あいさつをしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌あくる晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日きのう自分の方から話しかけた日蓮の事について、私に取り合なかつたのを、快く思つていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといつて、何だか私をさも軽薄もののやうにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠わたかまつていますから、彼の侮蔑おへつに

近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

三十一

こころ

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、しゅったつてん出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないのかと私に聞くのです。私は彼に告げまし

た。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういつた時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと
ちようぜんいつて悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、
しいた道のために体を鞭うったりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解

なんぎようくぎよう

らないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌る日
からまた普通の行商の態度に返つて、うんうん汗を流しながら
歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよい
と思い出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられた
のに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうとい
う悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言
葉を用いる代りに、もつと直截で簡単な話をKに打ち明けてし
まえば好かつたと思ひ出したのです。実をいうと、私がそんな
言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になつ
ていたのですから、事実を蒸溜して搾えた理論などをKの耳に
吹き込むよりも、原の形そのまゝを彼の眼の前に露出した方が、
私にはたしかに利益だつたでしょう。私にそれができなかった

のは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自おのずから一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎたといつても、虚栄心たが祟たたつたといつても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の気分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈こりくつはほとんど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しうに見える東京をぐるぐる眺ながめました。それから両国りょうごくへ来て、

暑いのに軍鶏しやもを食いました。Kはその勢いきおいで小石川こいしかわまで歩いて帰ろうというのです。体力からいえばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応うじました。

宅うちへ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚おどきました。二人はただ色が黒くなっただばかりでなく、むやみに歩いていたうちに大変瘠やせてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたといつて賞ほめてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいといつてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

「それのみならず私はお嬢さんわたくしの態度の少し前と変つてゐるのに気が付きました。久しぶりで旅から帰つた私たちが平生へいぜいの通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だつたのですが、その世話をしてくれる奥さんとはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しあとまわにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合によつてはかえつて不快の念さえ起しかねなかつたろうと思うのですが、お嬢さんの所作しよさはその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉うれしかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛あててくれたのです。だからKは別に厭いやな顔もせず平気でいました。私は心の中うちでひそかに彼に対する愷歌がいかを奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃なかごろから我々はまた学校の課業に出

席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自てんでんの都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後おくれて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰つてもお嬢さんの影をKの室へやに認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰つたのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寢坊ねぼうをした結果、日本服にほんふくのまま急いで学校へ出た事があります。穿物はきものも編上あみあげなどを結んでいる時間が惜しいので、草履ぞうりを突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻つて来ると、そのつもりで玄関の格子こうしをがらりと開けたのです。するといいと思つていたKの声が

ひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数^{てかず}のかかる靴を穿^はいていないから、すぐ玄関に上がって仕切^{しきり}の襖^{ふすま}を開けました。私は例の通り机の前に坐^{すわ}っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室^{へや}から逃^{のが}れ出るように去るその後姿^{うしろすがた}をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室にはいつてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといって私に挨拶^{あいさつ}をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌^{さば}けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立つて縁側^{えんがわづた}伝い

に向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻さつきの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になつて来ました。Kと私がいつしよに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入つて、ゆつくりしていました。無論郵便を持つて来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるのですから、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くよ

うに思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張^{ひっぱ}つて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套^{わたくしがいとう}を濡^ぬらして例の通り蒨^{こん}蒨^に閻^{やく}魔^{えんま}を抜けて細い坂路^{さかみち}を上^{あが}つて宅^{うち}へ帰りました。Kの室は空虚^{がらんどろ}でしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳^{かざ}そうと思つて、急いで自分の室の仕切^{しき}りを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種^{ひだね}さえ尽きている

ころ

のです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大方用事でもできたのだらうといっていました。

私はしばらくそこに坐ったまま書見をしました。宅の中がしんと静まって、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行き

なくなつたのです。雨はやつと歇あがつたようですが、空はまだ冷
 たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇じやの目めを肩に
 担かついで、砲兵工廠の裏手の土塀どべいについて東へ坂を下おりました。
 その時分はまだ道路の改正ができない頃ころなので、坂の勾配こうばいが今
 よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直まつすぐではなかつた
 のです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞ふさがつてい
 るのと、放水みずはきがよくないのとで、往来はどろどろでした。こと
 に細い石橋を渡つて柳町の通りへ出る間が非道ひどかつたのです。
 足駄あしだでも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路みちの
 真中に自然と細長く泥が搔かき分けられた所を、後生大事ごしやうだいじに辿たどつ
 て行かなければならないのです。その幅は僅わずか一、二尺しゃくしかな
 いのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向う
 へ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になつてそろそろ

通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kはちよつとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇の

ようにぐるぐる巻きつけてあつたものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どつちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行つて好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行つても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ歸つて来ました。

三十四

「私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。

Kはそうではないと答えました。真砂町まさごうちょうで偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくになりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中あててみると思いこむのです。その頃ころの私はまだ癩癩かんしゃくも持ちでしたから、そう不真面目ふまじめに若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気むじゃぎにやるのか、そのこの区別がちよつと判然はんぜんしない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方ほうでしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あ

と思えば思えなくもなかつたのです。そうしてその嫌いなと
 ころは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。
 私はそれをKに対する私の嫉妬しつとに帰きしていいものか、または私
 に対するお嬢さんの技巧と見倣みなしてしかるべきものか、ちよつ
 と分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を
 打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の
 裏面りめんにこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。し
 かも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事さじに、こ
 の感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事よじ
 ですが、こういう嫉妬しつとは愛の半面じゃないでしょうか。私は結
 婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しまし
 た。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。
 私はそれまで躊躇ちゆうちよしていた自分の心を、一思ひとおもいに相手の胸へ

擲^たき付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉^くれろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔^{ゆうじゆう}な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志^{いし}の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手^{ひと}に乗るのが厭^{いや}だという我慢が私を抑^{おさ}え付けて、一步も動けないようにしていました。Kの来た後^{のち}は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥^かを搔^かかせられるのが辛い^{つら}などというのと

は少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心ほか他の人に愛の眼まなこを注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭うれなのです。世の中では否応いやおうなしに自分の好いた女を嫁に貰もらつて嬉うれしがっている人もありますが、それは私たちよりよつぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑のみ込めない鈍物どんぶつのすること、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだぐらいの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にうえんも迂遠な愛の実際家だったのです。

肝心かんじんのお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許

されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえませんが。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。

三十五

「こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事ができずに立ち竦すくんでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼だけ覚さめて周囲のものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かさない場合があります。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。

その内年うちが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるたをやるから誰か友達だれを連れて来ないかといった事があります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶あいさつをするくらいのもものは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多かるたなどを取る柄がらではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかといひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事なまへんじをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々うちうちの小人数こにんずだけで取ろうという歌留多ですからすこぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、

まるで懷手ふとしろでをしてゐる人と同様でした。私はKに一体百人一首ひやくにんいつしゅの歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kはよく知らないと言こたへました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを輕蔑けいべつするとも取つたのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になつて私に当たるといふ有様になつて來ました。私は相手次第では喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と變りませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経たつた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にゐる親類の所へ行くといつて宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居同様あとに残つていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだつ

たので、ただ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顚を支えたなり
 考えていました。隣となりの室へやにいるKも一向音を立てませんでした。

双方ともいるのだから、私に別段それを気にも留めませんでした。
 もつともこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何とも
 なかったのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見合
 せました。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考えていると
 聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし
 考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも
 知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いています
 が、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭
 の中をぐるぐる回めぐるつて、この問題を複雑めづにしているのです。K
 と顔を見合せた私は、今まで臆おぼろげ氣に彼を一種の邪魔ものの如く

意識していながら、明らかにそうと答える訳にかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたっている火鉢の前に坐すわりました。私はすぐ両りょうひじ脇を火鉢の縁から取り除のけて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだらうというのです。私は大方叔母おばさんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君さいくんだと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過すぎだのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外ほかに仕方がありませんでした。

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答^{わたくし}えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限つてそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫^{ふる}えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生^{へいぜい}から何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖^{くせ}がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易^{たやす}く開^あかないところに、

彼の言葉の重みも籠こもっていたのでしよう。一旦いったん声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺ながめた時、私はまた何か出て来るなとすぐ疳かんづ付いたのですが、それがはたして何なんの準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみして下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなつてしまつたのです。

その時の私は恐ろしさの塊かたまりりといひましようか、または苦しさの塊りといひましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼吸をす

る弾力性さえ失われたくらいに堅くなつたのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策しまつたと思ひました。先を越せんされたなと思ひました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかつたのでしよう。私は腋わきの下から出る気味のわるい汗が襯衣シャツに滲しみ透とおるのを凝じつと我慢して動かずにいりました。Kはその間あいだいつもの通り重い口を切つては、ぽつりぽつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくつて堪たまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然はつきりした字で貼はり付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに氣の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事いっさいに一切を集中しているから、私

の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍^{のろ}い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず搔^かき乱されていましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌^{きざ}し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害

を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかったのです。またいう気にもならなかったのです。

ひるめし

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。

三十七

「二人は各自の室に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。

Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。

しかしそれにはもう時機が後れてしまったという気も起りました。

た。なぜ先刻^{さつぎ}Kの言葉を遮^{さへぎ}つて、こつちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手落^{てぬか}りのように見えて来ました。せめてKの^{あと}後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたらうにととも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺^ゆられてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切^{しき}りの襖^{ふすま}を開^あけて向うから突進してきてくれれば好^いいと思ひました。私にいわせれば、先刻はまるで不意^{ふいうち}撃に会つたと同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下^{した}心^{こころ}を持つていました。それで時々眼を上げて、襖^{なぐ}を眺めました。しかしその襖はいつまで経^たつても開^あきません。そうしてKは永

久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になつて堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事ができなかったのです。一旦いいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。

しまいに私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なし

に立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶てつびんの湯を湯呑ゆのみに注ついで一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往来の真中に見出したみいだのです。私には無論どこへ行くという的あてもありません。ただ凝じつとしていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻まわつたのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落ふるす気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼そしやくしながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解かいしがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないければいけないほどに、彼の恋が募つつて来たのか、そうし

て平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもっていると感じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐っている彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いていても彼を動かす事は到底できないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人気のないように静かでした。

三十八

「私が家へはいると間もなく俵くるまの音が聞こえました。今のよう
に護謨輪ゴムわのない時分でしたから、がらがらいう厭いやな響ひびきがかな
りの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。
私が夕飯ゆうめしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経たつた
後の事あとでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着はれぎが脱すぎ棄すてられ
たまま、次の室を乱雑いろどに彩いろどっていました。二人は遅くなると私
たちに済まないというので、飯の支度しどに間に合うように、急い
で帰かえつて来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに
取とつてほとんど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、
言葉を惜おししがる人のように、素気そっけない挨拶あいさつばかりしていました。

Kは私よりもなお寡言^{かげん}でした。たまに親子連^{おやこづれ}で外出した女二人の気分が、また平生^{へいぜい}よりは勝^{すぐ}れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利^ききたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利^きたくないのかと追窮^{ついきゆう}しました。私はその時ふと重^{まふた}たい瞼^{まぶた}を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫^{ふる}えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしたか思われないのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうといいました。Kの顔は心持薄赤くな

りました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやといって、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕元に坐つて、風邪を引いたのだろうから身体を暖ためるがいいといって、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しまし

た。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶あいさつがありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入おしいれをがらりと開けて、床とこを延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時なんじかとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈ラングをふつと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴さえて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝けさ彼から聞いた事について、もつと詳しい話をしたいが、彼の都合は

どうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越ふすまごしにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻さつきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直すなおな調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはっと思わせられました。

三十九

「Kの生返事なまへんじは翌日よくじつになつても、その翌日になつても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色けしきを決して見せませんでした。もつとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃そろつて一日宅うちを空あけでも

しなければ、二人はゆつくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があつたらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙つて家のものうちの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振そぶりにも、別に平生へいぜいと変つた点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心かんじんの本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥たしかでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会こしちを拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さない

ようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こういつてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮しおの満干みちひと同じように、色々の高低たかびくがあつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと思つてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭めいりょうに偽りなく、盤上ばんじょうの数字を指し得るものだろうかと思えました。要するに私は同じ事をこうも取り、あも取りした揚句あげく、漸くようやここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかつたのかも知れません。

その内学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならないと、私は思つたのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだつたので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があつ

たのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家ようかを三年も欺あざむいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向つて、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠かくし立てをしてくれるな、すべて思つた通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然はつきり断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言いちげん

の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まつて底^{そこ}まで突き留める訳にいきません。ついそれなりにしてしまいました。

四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引^ひつ繰^くり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出

して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかというのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っているといったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。

すると私は気が散つて急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、^{いちもつ}談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかつたので、^{たつおかちよう}竜岡町から池の端へ出て、^{うえの}上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を^{そうじよう}綜合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引^ひつ張^はり出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵^{ふち}に陥^{おちい}つ

た彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言でいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事ができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱くでき上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何んで私の批評が必要なかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際耻ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので、私に公平な

批評を求めるより外ほかに仕方がないといいました。私は隙すかさず迷うという意味を聞き糺ただしました。彼は進んでいいか退しりぞいていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴かわき切った顔の上に慈雨じうの如く注そそいでやったか分りません。私はそのくらい美しい同情をもつて生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

「私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向つたのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆくりそれを眺める事ができたのも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向つて急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分も

あつたのですから、自分に滑稽こっけいだの羞恥しゅうちだのを感じる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿ばかだ」といい放ちました。これは二人で房州ぼうしゅうを旅行している際、Kが私に向つて使つた言葉です。私は彼の使つた通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ふくしゅうではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもつていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手ゆくてを塞ふさごうとしたのです。

Kは真宗寺しんしゅうでらに生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨しゅうしに近いものではなかつたのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知しています。私はただ男女なんによに關係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進しやうじんという言葉が好きでした。

私はその言葉の中に、禁欲きんよくという意味も籠こもっているのだらうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはずべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂欲せつよくや禁欲きんよくは無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころからお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑おべつの方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って

痛いに違いなかったのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折角^{せっかく}積み上げた過去を蹴散^{けち}らしたつもりではありません。かえってそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留^どまったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私には

Kがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしても彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。

四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適当かも知れませんが。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯

だと言ひとことさざ私語いてくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はつと我に立ち帰つたかも知れません。もしKがその人であつたなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘たしなめるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だつたのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、かえつてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留まめました。するとKも留ままりました。私はその時やつとKの眼を真向まむきに見る事ができたのです。Kは私より背せいの高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼おおかみのごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話は止めよう」と彼がいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶ができなかつたのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向つて残酷な答を与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「止めてくれって、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこういった時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、

自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平氣でいられない質たちだったのです。私は彼の様子を見てようやくやく安心しました。すると彼は卒然そつぜん「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子は独言ひとりごとのようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川こいしかわの宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋さびしいものでした。ことに霜に打たれて蒼味あおみを失った杉の木立こだちの茶褐色が、薄黒い空の中に、梢こずえを並べて聳そびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ囓かじり付いたような心持がしました。我々は夕暮ほんごうだいの本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡おかへ上るべく小石川の谷へ下り

たのです。私はその頃ころになつて、ようやく外套がいとうの下に体たいの温味あたたかみを感じ出したぐらいです。

急いだためでもありませんが、我々は帰り路みちにはほとんど口を聞きませんでした。宅うちへ帰つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘われて上野うえのへ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにといつて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生へいぜいから無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌ろくな挨拶あいさつはしませんでした。それから飯めしを呑み込むように掻きか込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へやへ引き取りました。

四十三

ころ

「その頃は覚醒かくせいとか新しい生活とかいう文字もんじのまだない時分でした。しかしKが古い自分をさりと投げ出して、一意いちいに新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊たつとい過去があつたからです。彼はそのため今日こんにちまで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないといて、決してその愛の生温なまぬるい事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈しれつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏み留とどまつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうす

ると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情しやうじやうと我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野うえのから帰った晩は、私に取って比較的安静な夜よでした。私はKが室へやへ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍そばに坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳かざした後、自分の室に帰りました。外ほかの事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖ふすまが二尺しゃくばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵よいの通りまだ燈火あかりが点ついているのです。急に世界の変った私は、少しの間口あいだを利きく事もできずに、ぼうつとして、その光景を眺ながめていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師かげぼうしのようなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈ランプの灯ひを背中に受けていたので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち付いていたくらいで

した。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇くらやみに帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝よくあさになつて、昨夕ゆうべの事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯めしを食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといひます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然はつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡ができるのかとかえつて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちようど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていつしよに宅うちを出しました。今朝けさから昨夕の事

が氣に掛^かつてゐる私は、途中でまたKを追窮^{ついぎゆう}しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日^{きのう}上野で「その話はもう止^やめよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑^{おさ}え始めたのです。

四十四

「Kの果斷に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと思い出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでい

るのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもつて、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかったかも知れません。悲し

い事に私は片眼めっかちでした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといちず一図に思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間まに、事を運ばなくてはならないと覚悟を極きめました。私は黙もくって機会を覘ねらっていました。しかし二日経たつても三日経たつても、私はそれを捕つかまえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいら

いりました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病けびょうを遣つかいまし

た。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起きろとい

う催促を受けた私は、生返事なまへんじをしただけで、十時頃じごろまで蒲団ふとんを

被かぶつて寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなつて、家の

内なかがひっそり静まつた頃を見計みはからつて寢床を出ました。私の顔

を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物たべものは枕元まくらもと

へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してもく

れました。身体からだに異状のない私は、とても寝る気にはなれませ

ん。顔を洗つていつもの通り茶の間で飯めしを食いました。その時

奥さんは長火鉢ながひばちの向側むこうがわから給仕をしてくれたのです。私は朝飯あさめし

とも午飯ひるめしとも片付かない茶碗ちやわんを手に持ったまま、どんな風に問

題を切り出したものだろうか、そればかりに屈托くつたくしていたか

ら、外観からは實際氣分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終しまつて烟草タバコを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢そばの傍を離れる訳にゆきません。下女げじょを呼んで膳ぜんを下さげさせた上、鉄瓶てつびんに水を注さしたり、火鉢の縁ふちを拭ふいたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかといって、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩もりました。

私は仕方なしに言葉の上で、好いい加減にうろつき廻まわった末、

Kが近頃何かいいはしなかつたかと奥さんちかごろに聞いてみました。奥さんは思ひも寄らないという風をして、「何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおつしやつたんですか」とかえつて向うで聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかつた私は、「いいえ」といつてしまつた後で、すぐ自分の嘘うそを快こころよからず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といつて、後あとを待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さ

ん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着とんじやくなどはしていません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰もらいたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘

れてしまいました。男のように判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて威張いばった口の利きける境遇ではありません。どうぞ貰あつて下さい。ご存じの通り父親のない憐あわれな子です」と後あとでは向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭めいりょうに片付いてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分とは掛からなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だといいました。本人の意嚮いこうさえたしかめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘泥こうでいするくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾ちうとくを得

るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」といいました。

自分の室へ^{へや}帰った私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、かえつて変な気持になりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に^は這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃^{ひるごろ}また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝^{けさ}の話をお嬢さんに何時^{いつ}通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなかうというような事をいうのです。こうなると何だか私よりも相手の方が

男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古けいこから帰つて来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐すわつて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被かぶつて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子を脱とつて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒なおつたのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋すいどうばしの方へ曲つてしまいました。

四十六

こころ

「私は猿楽町さるがくちようから神保町じんぼううちようの通りへ出て、小川町おがわまちの方へ曲りました。私がこの界限かいがいを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或ある時は、もうあの話が済んだ頃だとも

思いました。

私はとうとう万世橋まんせいばしを渡つて、明神みょうじんの坂を上がつて、本郷台ほんごうだいへ来て、それからまた菊坂きくざかを下りて、しまいに小石川こいしかわの谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨またがつて、いびつな円を描えがいたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向いっこう分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得うるくらい、一方に緊張してゐたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに對する私の良心が復活したのは、私が宅の格子こうしを開けて、玄關げんくわんから坐敷ざしきへ通る時、すなわち例のごとく彼の室へやを抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向つて書見をしてい

ました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとはいいいませんでした。彼は「病気はもう癒いいのか、医者へでも行つたのか」と聞きました。私はその刹那せつなに、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野こうやの真中にでも立つていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯ゆうめしの時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉うれしそうでした。私だけが

すべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうといつて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛かりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生

より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いて
 いる点までは話を進めずにしまいました。私はほつと一息して
 室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態
 度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられま
 せんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵こしらえてみました。け
 れどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、
 卑怯ひきような私はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったの
 です。

四十七

「私はそのまま二、三日過ぎしました。その二、三日の間Kに
 対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもあ

りません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟しげきするのですから、私はなお辛つらかつたのです。どこか男らしい気性を具そなえた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素すつぱ抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作きよしどうさも、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしあ

りのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくのないのに変りはありません。といって、拵こしらえ事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問きつもんされるに極きまつています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝さらけ出さなければなりません。真面目まじめな私には、それが私の未来の信用に關すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘ぶんりんでも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直みちな路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾こうかつな男でした。そうしてそこに氣のついてゐるものは、今のところただ天と私の心だけだつたのです。しかし立ち直つて、もう一步前へ踏み出そうとするには、

今滑った事をぜひと周囲の人に知らなければならない窮境きゆうぎように陥おちいったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。

同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟はさまってまた立ち竦すくみました。

五、六日経たった後のち、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰なじめるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾わたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生へいぜいあんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました

た。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもっと細^{こま}かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固^{もと}より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語つて聞かせてくれました。

奥さんのいうところを綜合^{そうごう}して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもつて迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口^{ひとくち}いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩^もらしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子^{しょうじ}を開ける前に、また奥さんを振り返つて、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金が

ないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐つて^{すわ}いた私は、その話を聞いて胸が塞^{ふさが}るような苦しさを覚えました。

四十八

こころ

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かず^{あた}にいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけにせよ、敬服に値^{あた}すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙^{はる}かに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私

はその時さぞKが輕蔑けいべつしている事だろうと思つて、一人で顔を赧あからめました。しかし今更Kの前に出て、恥を搔かかせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進もうか止よそうかと考えて、ともかくも翌日あくるひまで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然ぞっとします。いつも東枕ひがしまくらで寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕とこに床を敷いたのも、何かの因縁いんねんかも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室へやとの仕切の襖しきりが、この間の晩と同じくらい開あいています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突いて起き上がりながら、屹きつとKの室のぞを覗きました。

ランプが暗く点つてゐるのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つてゐるのです。そうしてK自身は向うむきに突ッ伏してゐるのです。

私はおいといつて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策つたと思ひました。

もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らししました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛なあてになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句つらがその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、ま

ず助かつたと思ひました。(固より世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件

に見えたのです。」

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自

分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだ

けなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあつ

さりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついで

に死後の片付方かたづけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに

迷惑を掛けて済まんから宜よろしく詫わびをしてくれという句もありま

した。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありま

した。必要な事はみんな一口ひとくちずつ書いてある中にお嬢さんの名

前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐK

がわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私の

もつとも痛切に感じたのは、最後に墨すみの余りで書き添えたらし

く見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたの

だろうという意味の文句でした。

私は顫^{ふる}える手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆^{みんな}の眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖^{ふすま}に迸^{ほとばし}っている血潮を始めて見たのです。

四十九

「私は突然Kの頭を抱^{かか}えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔^{しにがお}が一目見た^{ひとめ}かったです。しかし俯伏^{うつぶ}しになつてゐる彼の顔を、こうして下から覗^{のぞ}き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄^{ぞつ}としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触^{さわ}った冷た

い耳と、平生へいぜいに変らない五分刈ごぶがりの濃い髪しほらくながの毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能しげきを刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然こつぜんと冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別ぶんべつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事もできないのだと思ひました。座敷の中をぐるぐる廻らなければならぬなつたのです。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。け

れども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないとは授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日

私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だといつて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室^{へや}まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不断着^{ふだんぎ}の羽織^ひを引^ひつ掛^かけて、私の後^{あと}に跟^ついて来ました。私は室へはいるや否^{いな}や、今まで開^あいていた仕切りの襖^{ふすま}をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は願^{あじ}で隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」といいました。奥さんは蒼^{あお}い顔をしました。「奥さん、Kは自殺^{いすく}しました」と私がまたいいました。奥さんはそこに居^い竦^{すく}まったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さん

にも済まない事になりました」と詫^{あや}まりました。私は奥さんと
 向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったので
 す。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそういつて
 しまったのです。Kに詫^わまる事のできない私は、こうして奥さ
 んとお嬢さんに詫^わびなければならなくなつたのだと思つて下
 さい。つまり私の自然^{へいぜい}が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔^{ざんげ}
 の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉
 を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、
 「不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰める
 ようにいつてくれました。しかしその顔には驚きと怖^{おそ}れとが、
 彫^ほり付けられたように、硬^{かた}く筋肉を攪^{つか}んでいました。

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立って今閉めたばかりの唐紙からかみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、室へやの中はほとんど真暗まっくらでした。私は引き返して自分の洋燈を手に持ったまま、入口に立って奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳よじの中を覗のぞき込みました。しかしはいろうとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私にいいました。

それから後の奥さんあとの態度は、さすがに軍人の未亡人びぼうじんだけあって要領を得ていました。私は医者いしやの所へも行きました。また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続てつづきの済むまで、誰もKの部屋へは入いりませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまったのです。外ほかに創きずらしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯ひで見た唐紙の血潮は、彼の頸筋くびすじから一度に迸ほとばしつたものと知れました。私は日中の光にっしゅうで明らかにその迹あとを再び眺ながめました。そうして人間の血の勢いきおいというものの劇はげしいのに驚おどろきました。

奥さんと私はできるだけの手際てぎわと工夫を用いて、Kの室へやを掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団ふとんに吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末は三まだ楽でした。二人は彼の死骸しがいを私の室に入れて、不斷の通り寝ている体ていに横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰つた時は、Kの枕元まくらもとにもう線香が立てられていました。

室へはいるとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐すわつてゐる女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい氣分に誘われる事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛くろろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤うるおいを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。私は黙つて二人の傍そばに坐つていました。奥さんは私にも線香を上げてやれといいます。私は線香を上げてまた黙つて坐つていました。お嬢さんは私には何ともいいません。たまに奥さんひとくちふたくちと一口二口言葉を換かわす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほど

の余裕がまだ出て来なかつたのです。私はそれでも昨夜の物凄^{ゆうべのものすご}い有様を見せずに済んでまだよかつたと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角^{せつかく}の美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖^{こわ}かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事はできませんでした。私には綺麗^{きれ}な花を罪もないのに妄^{みだ}りに鞭^{むち}うつと同じような不快がそのうちに籠^{こも}っていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋^うめるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前^{ぞうしがや}に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談^{じょうだんはんぶん}半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるので

す。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬^{ほうむ}ったところで、どのくらいの功德^{くどく}になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪^{ひざまず}いて月々私の懺悔^{ざんげ}を新たにしました。今まで構^{かま}い付けなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

五十一

「Kの葬式の帰り路^{みち}に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した

知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛^{あて}で書き残した手紙を繰り返すだけで、外^{ほか}に一口^{ひとくち}も付け加える事はありませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐^{ふところ}から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所^{えんせいてき}を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を^{たた}畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外^{ほか}にもKが気が狂つ

て自殺したと書いた新聞があるといつて教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅うちのものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合ひいに出たら堪たまらないと思つていたのです。私はその友人に外ほかに何とか書いたのはないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種こぎりだと答えました。

私が今おる家へ引ひつ越こしたのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭いやがりますし、私もその夜よの記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極きめたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。

卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目出度といわなければなりません。奥さんもお嬢さんもちかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いましたが。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻さいといえます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようといい出しました。私は意味もなかっただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃そろってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしけじけ眺ながめていま

したが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ぞうしヶ谷がやへ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末てんまつを述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫なでてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立みたてたりした因縁いんねんがあるので、妻はとくにそういいたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋うづめられたKの新しい白骨はくこつを思い比べて、

運命の冷罵れいばを感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

五十二

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたといえはいえない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、

ことによるとあるいはこれが私の心持を一転して新しい生涯はいに入る端緒いとくちになるかも知れないとも思ったのです。ところがいよいよ夫として朝夕妻さいと顔を合せてみると、私の果敢はない希望は手厳しい現実のために脆もろくも破壊されてしまいました。私は妻

と顔を合せているうちに、卒然^{そつぜん} K に脅^{おびや}かされるのです。つまり妻が中間に立つて、K と私をどこまでも結び付けて離さないようにするので。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映^{うつ}ります。映るけれども、理由は解^{わか}らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうとかいう詰問^{きつもん}を受けました。笑って済ませる時はそれで差支^{さしつか}えないのですが、時によると、妻の癩^{かん}も高^{こう}じて来ます。しまいには「あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言^{えんげん}も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層^{いっそう}思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした

事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を抑え付けおさけるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対しておの己れを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔ざんげの言葉を並べたなら、妻は嬉し涙うれをこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印いんするに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一雫ひとしずくの印気インキでも容赦ようしゃなく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経たつてもKを忘れる事のできなかった私の心は常に不安

でした。私はこの不安を駆逐くちくするために書物に溺れようと力めつとました。私は猛烈な勢いきおいをもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公おおやけにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵こしらえて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘うそですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋うずめていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺めながめだしたのです。

妻はそれを今日こんにちに困らないから心に弛たるみが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐すわつていてどうかこうか暮さしつかして行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支さしつかえのない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありましよう。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつ

たのです。叔父おじに欺あざむかれた当時の私は、他の頼ひとみにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他ひとを悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるともこの己おれは立派な人間だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事みごとに破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他ひとに愛想あいそを尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生埋いきうめにする事のできなかつた私は、酒に魂ひたを浸ひたして、己おのれを忘わすれようと試みた時期もあります。私は酒

が好きだとはいいません。けれども飲めば飲める質たちでしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰つぶそうと力めたのです。この浅薄せんぱくな方便まつさいちゆうはしばらくするうちに私をなお厭世えんせい的にしました。私は爛醉らんすいの真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似まねをして己れを偽いつわっている愚物ぐぶつだという事に気が付くのです。すると身振みふるいと共に眼も心も醒さめてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入はいり込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後あとには、きつと沈鬱ちんうつな反動があるのです。私は自分の最も愛している妻さいとその母親に、いつでもそこを見せなければならなかったのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛かります。

妻の母は時々氣拙きまづい事を妻にいうようでした。それを妻は私

に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかったらしいのです。責めるといっても、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例はほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいつてくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫^{あや}まりました。それは多く酒に酔つて遅く帰つた翌^{あくるひ}日の朝でした。妻は笑いました。あるいは黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪^{たま}らなかつたのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止め^やめました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭^{いや}になつたから止めたといつた方が適當でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣^うつて置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたつた一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。

理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂^{せき}寞^{ぼく}でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。うが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正^{まさ}しく失恋のために死んだものとすぐ極^きめてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つてみると、そう容易^{たやす}くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋^{さび}しくって仕方がなくなつた結果、急に所決^{しよけつ}したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄^{ぞつ}とし

たのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです。

五十四

「その内妻さいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とくいなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありましたが、もつと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくつて堪たまらなかつただけけれども、何もする事ができないのでやむをえずふといしうで懷手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、

始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたという自覺を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻はたつた二人ぎりになりました。妻は私に向つて、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたといひました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考へで彼女を觀察しているために、そんな事もういふようになるのだと恨みました。

母の亡くなつた後、私はできるだけ妻を親切に取り扱つてや

りました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちようど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る氣遣きづかいはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注うれされる親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかといいました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧あいまいな返事をしておきました。妻は自分の過去を振

り返つて眺^{なが}めてゐるようでしたが、やがて微^{かす}かな溜息^{ためいき}を洩^もらしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃^{ひらめ}きました。初めはそれが偶然^{そと}外から襲^襲つて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしてゐる中^{うち}に、私の心がその物^{もの}凄^{すご}い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜^{ひそ}んでゐるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑^{うたぐ}つてみました。けれども私は医者にも誰^みにも診^みてもらはう気にはなりませんでした。私はただ人間の罪^{まい}というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓^{まい}へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命

じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという氣になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日こんにちまで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取つては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻さいに対して非常に氣の毒な氣がします。

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟しげきで躍り上がりおどりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けおさるようにいつて聞かせます。すると私はその一言で直ぐすぐたりと萎しおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるうとすると、また締め付けられます。私は齒を食いしばつて、何で他の邪魔ひとをするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知つてゐるくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

はらん

波瀾も曲折もない単調な生活が続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があつたものと思つて下さい。妻さいが見てはがゆ齒痒はがゆがる前に、私自身が何層倍なんぞうばい齒痒はがゆい思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋ろうやの中に凝じつとしてしている事がどうしてもできなくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなつた時、必竟ひつきよう私にとつて一番楽な努力で遂行すいこうできるものは自殺より外ほかにないと私は感ずるようになったのです。あなたはなぜといつて眼を睜みはるかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日こんにちに至るまで二、三度運命の導いて行く最も樂な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹ひかされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲ぎせいとして、妻の天寿てんじゅを奪うなどという手荒てあらな所作しよさは、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻まわり合せがあります、二人を一束ひとたばにして火に燻くべるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなった後あとの妻を想像してみるといかにも不憫ふびんでした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったといった彼女の述懐じゆつかいを、私は腸はらわたに沁しみ込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇ちゅうちよしま

した。妻の顔を見て、止よしてよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝じつと竦すくんでしまいます。そうして妻から時々物足りなさそうな眼で眺ながめられるのです。

記憶して下さい。私はこんな風ふうにして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉かまくらで会つた時も、あなたといつしよに郊外を散歩した時も、私の氣分に大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括くツ付ついていました。私は妻さいのために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ歸る時も同じ事でした。九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘うそを吐ついたではありません。全く会う氣でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きても、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御めいじてんのう ほうぎよになりました。その時

私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後あとに生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだという感じが烈はげしく私の胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にそういいました。妻は笑つて取り合いませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死じゅんしでもしたらよかろうと調戲からかいました。

五十六

「私は殉死という言葉をはほとんど忘れていました。平生へいぜい使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談じょうだんを聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死

するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年月を勘定して見ました。西南戦争

は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間死あいだのう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人に取つて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那いつせつなが苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑のみ込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは箇人こじんのもつて生れた性格の相違といった方が確たしかかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私おのというものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己おのれを尽つくしたつもりです。

私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖きょうふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こつそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする氣でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然はつきり描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興すいきように書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外ほかに誰も語り得るものはないのですか

ら、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではな
 ころうと思います。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死
 期を一週間繰り延べたという話をつい先達て聞きました。他か
 ら見たら余計な事のようにも解釈できましようが、当人にはま
 た当人相応の要求が心の中にあるのだからやむをえないともい
 われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たす
 ためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動か
 された結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事は
 ありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこ
 の世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十
 日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で

手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰つて来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考^{ひと}に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己^{おの}れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一^{ゆい}の希望なのですから、私が死んだ後^{あと}でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

後註

- 一 「私に」は底本では「私は」
- 二 「出せなかった」は底本では「出せなかったの」
- 三 「後始末は」は底本では「後始末は」

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成 3）年 2 月 25 日第 1 刷

1995（平成 7）年 6 月 14 日第 10 刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正 3）年 4 月 20 日～8 月 11 日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999 年 7 月 31 日公開

2010 年 10 月 31 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。